

『第20回石川県書写書道教育研究大会集録』の発刊よせて

石川県書写書道教育連盟会長

第20回石川県書写書道教育研究大会会長

藤 則雄

石川県書写書道教育連盟は、幼稚園・小学校・中学校・高等学校・大学・特殊学校等の6種学校が一体となり、各学校における授業研究を中心に据えて、最近における今日的書写書道に係わる教育問題、就中、教材研究・教師の資質向上等に力を注ぎ、児童・生徒・学生の心を豊かに育成すべく、各地で開催の大会や研修会にも積極的に参加し、研鑽して参りました。本平成21年度には、本石川県書写書道教育連盟が創設されて20回目の記念すべき、節目の研究大会を、多くの会員の参加の下で開催できましたことは、誠に喜ばしいことであります。即ち、本第20回研究大会においては

公開授業Ⅰ : 12月2日 午前中 於 金沢市立諸江町小学校

授業 : 書き初め「希望の春」(5年1組) 指導者 柿木 千鶴先生(諸江町小学校)

研究協議会Ⅰ : 助言者 地下 雅志指導主事(金沢市教育委員会学校指導課)

司 会 石野 昌子先生(金沢市立扇台小学校)

公開授業Ⅱ : 12月2日 午後中 於 金沢市立高岡中学校

授業 : 書き初め「世界遺産」(1年1組) 指導者 八田 和幸先生(高岡中学校)

書き初め「世界遺産」(1年2組) 指導者 平山 洋之先生(高岡中学校)

研究協議会Ⅱ : 助言者 日向 正志指導主事(石川県教育委員会学校指導課)

司 会 白石 芳子先生(金沢市立西南部中学校)

石川県書写書道教育連盟 平成21年度全体会

第20回研究大会 記念講演会

演 題 : 『石川県書写書道教育連盟』設立と書写書道教育の将来について

—人間が人間になること・文字を手書きすること—

講 師 : 法水 光雄先生(福井大学教授)

本研究大会における報告は、何れもレベルが高く、極めて内容のある研究で、本石川県書写書道教育連盟を構成する会員の優秀さを示唆しているものであります。また、法水先生のご講演は、本記念大会に花を添えて頂ける程に心に残る感銘深い内容でありました。会員各位には、これからの日々の教育や研鑽の一助として頂けるのではないかと思量するものであります。

末筆になりましたが、本第20回研究大会の開催において、授業や助言をされた先生や開催のためにご尽力頂いた役員、本大会集の集録の任に当たられた会員の皆様に心からの感謝の意を表します。本石川県書写書道教育連盟の益々の発展と会員各位の研究とご健勝を祈念申し上げます。

祝 辞



石川県教育委員会教育長
中西 吉明

石川県書写書道教育研究大会が、この度、第20回の節目を迎えられ、盛大に開催されますことを、心からお祝い申し上げます。

また、石川県書写書道教育連盟が、県内の幼稚園から大学に至るすべての校種において、一貫した書写書道教育と書道文化の更なる充実発展を目的に掲げ、活発に活動を続けてこられたことに、深く敬意を表するものであります。

さて、コンピュータの普及によるIT社会が進展している現代において、「いつでも、どこでも、誰とでも」容易に情報交換ができるシステムが構築されています。しかしながら、言葉で伝えることを安易にとらえ、時には不適切な言葉を発することで、相手を困らせたり、さらには、傷つけたりする場合も見受けられます。子どもたちの世界においても、もっと言葉を大切にする意識を持って、自らの思いを自らの言葉で真摯に伝える力が、一層求められるのではないのでしょうか。

このような時代にこそ、書写書道教育の文字文化に対する認識や感性を育てる観点が、重要になってまいります。

先人たちの書に接する時、そこに表れる先人の息づかいを感じ、私たちは深い感動を覚えます。例えば、筆運びに強い意志を感じさせる坂本龍馬の書体、また、息子を思って綴った野口英世の母の手紙の、一見たどたどしく思われるような書体にも我々は心を奪われます。肉筆の持つ力が確かに存在するのです。

私たちは、世代を超え、学校生活の中で「墨をすり、筆を持って、真っ白な紙に向かう」という経験を共有しております。何枚も何枚も練習し、清書に向かう時の緊張感。この過程には、メールやワープロでは到底及ばない、豊かな心を育む力が秘められているものと考えます。

本県の教育にとりまして、貴連盟の実践は誠に意義深いものであります。今後とも様々な創意工夫を重ねられ、互いの研究発表を通じて更なる研鑽を積まれますことを期待いたします。

最後になりましたが、本研究大会開催にご尽力いただきました方々、研究発表や研究授業をされた先生方のご苦勞に、心から感謝申し上げますとともに、石川県書写書道教育連盟の益々の発展をお祈りし、お祝いの言葉といたします。

お祝いの言葉



金沢市教育委員会教育長
浅香 久美子

石川県書写書道教育連盟が、第20回大会を迎えられましたこととお喜び申し上げます。また、記念すべき節目となる大会が当金沢市において開催されましたことを心よりうれしく思います。

さて、平成23年度には小学校において、次年度には中学校において、新学習指導要領が全面実施となります。そこでは、伝統文化の教育の充実に加え、書写の指導については、「毛筆を使用する書写の指導は硬筆による書写の能力の基礎を養うよう指導し」とされ、国語科におけるねらいがより明確に示されました。このことは、従前にも増して、毛筆で文字を正しく整えて書くことの基礎・基本を硬筆に関連させた指導計画や指導法を創意工夫することの必要性を示しております。

過日、本市の小中学校で公開された授業では、毛筆書写の「書き初め」に向けての授業が行われましたが、年が明けて、心持ちを新たにし、静かに筆を手にする「書き初め」は、日本の伝統的な言語文化の一つであります。そのような文化に触れ、学ぶという価値から考えましても、書写書道教育の果たす役割の大きさが伺い知れるところです。

本市においては、今年度より、児童生徒一人一人が、人與人、社会、自然、世界などと自分との関わりやつながりを意識し、他者との「絆」を大切にする金沢「絆」教育を推進しております。書写書道教育を通して、児童生徒一人一人が伝統的な言語文化に触れることにより、改めて我が国の永い歴史と、そこに培われてきた文化とのつながりを感じとってほしいと思っています。

本大会は、今後も石川県の様々な地域において、継続して開催されていくとお聞きしております。石川県全体の書写書道教育のさらなる充実のために、石川県書写書道教育連盟の益々の発展を期待いたしております。

最後に、第20回大会を開催するにあたり、ご尽力いただいた関係者のみなさまに敬意を表し、お祝いの言葉といたします。

目 次

1. はじめに	1
2. 第20回のお祝いの言葉	2
中西 吉明 (石川県教育委員会教育長)	
浅香 久美子 (金沢市教育委員会教育長)	
3. 第20回石川県書写書道教育研究大会要項	5
4. 小学校授業公開報告	9
◇授業指導案と授業者のふりかえり	
柿木 千鶴 (金沢市立諸江町小学校)	
◇整理会報告 寺井 純子 (珠洲市立蛸島小学校)	
5. 中学校授業公開報告	17
◇授業指導案と授業者のふりかえり	
八田 和幸 (金沢市立高岡中学校)	
平山 洋之 (金沢市立高岡中学校)	
◇整理会報告 東間 郁子 (七尾市立田鶴浜中学校)	
6. 講演録	29
7. 大会に参加して	39
岡山 佳代 (内灘町立清湖小学校)	
佐渡那々子 (金沢市立緑中学校)	
8. 全高書研大会参加報告	41
水上真由美 (石川県立金沢商業高等学校)	
9. 石川県書写書道教育研究大会20年を振り返って	43
永江 芳教 (金沢泉丘高等学校)	
10. 石川県書写書道教育連盟のあゆみ	49
11. 平成21年度石川県書写書道教育連盟役員一覧	55
12. 石川県書写書道教育連盟規約	57

第20回石川県書写書道教育研究大会

平成21年12月2日(水)

第20回

石川県書写書道教育研究大会

金沢市立高岡中学校・諸江町小学校

大会テーマ

「基礎・基本をふまえて、豊かな心を育てる書写書道教育」
— 自ら発見し、学びを深める書写書道教育 —

主催：石川県書写書道教育連盟

後援：石川県教育委員会

：金沢市教育委員会

：石川県私立幼稚園協会

日程

10:00～10:30 受付	10:45～11:30 公開授業Ⅰ (諸江町小学校) 11:40～12:10 研究協議会Ⅰ	移動・昼食 12:50～13:15 理事会	13:30～14:20 公開授業Ⅱ (高岡中学校) 14:30～15:15 研究協議会Ⅱ	15:20～15:40 全体会 15:45～16:45 講演会 (高岡中学校)
-------------------	---	-----------------------------	--	---

諸江町小学校（10:45～12:10）

公開授業Ⅰ [10:45～11:30]

小学校5年1組 書き初め「希望の春」

指導者：柿木 千鶴 先生（金沢市立諸江町小学校）

研究協議会Ⅰ（授業整理会） [11:40～12:10]

助言者： 地下 雅志 指導主事（金沢市教育委員会学校指導課）
司 会： 石野 昌子 先生（金沢市立扇台小学校）
記 録： 寺井 純子 先生（珠洲市立蛸島小学校）

高岡中学校（13:30～16:45）

公開授業Ⅱ [13:30～14:20]

中学校1年1組 書き初め「世界遺産」

指導者：八田 和幸 先生（金沢市立高岡中学校）

中学校1年2組 書き初め「世界遺産」

指導者：平山 洋之 先生（金沢市立高岡中学校）

研究協議会Ⅱ(授業整理会) [14:30~15:15]

助言者： 日向 正志 指導主事 (石川県教育委員会学校指導課)
司 会： 白石 芳子 先生 (金沢市立西南部中学校)
記 録： 東間 郁子 先生 (七尾市立田鶴浜中学校)

全 体 会 [15:20~15:40]

挨 拶： 石川県書写書道教育連盟 会長
祝 辞： 石川県教育委員会 ・ 金沢市教育委員会

講 演 会 [15:45~16:45]

演 題

「 石川県書写書道教育連盟設立と書写書道教育の将来について

— 人間が人間になること・文字を手書きすること — 」

講 師 法 水 光 雄 先生 (福井大学教育地域科学部教授)

小 学 校 授 業 公 開 報 告

5年1組 国語科（書写）学習指導案

2009年12月2日（水）3限

指導者 柿木 千鶴

1. 単元名 字配りを知ろう（書きぞめ）『希望の春』
2. 目標
 - ・文字の組み立てに関心を持って意欲的に書きぞめに取り組む。（関心・意欲・態度）
 - ・文字の大小や中心・字間・余白などについて理解し、字配りよく書くことができる。（知識・理解・技能）

3. 指導にあたって

（1）教材について

第5学年の書写の指導事項は、

（ア）文字の形、大きさ、配列などを理解して、読みやすく書くこと。

（イ）毛筆を利用して、点画の筆使いや文字の組み立て方を理解しながら、文字の形を整えて書くこと。

（ウ）毛筆を利用して、字配りよく書くこと。

の3つである。5年生では、特にいろいろな文字の組み立て方を理解し、文字の形を整えて書くことに重点を置きながら学習を進めてきている。そして、後半には学習したことを生かして字配りを考えながら書くということが指導事項の中心となっていく。

本単元は、文字の組み立て方・行の中心・文字の大きさなどこれまで学んできたことを生かして毛筆や硬筆で書きぞめをする。字配りよく書くためには、文字の大きさや中心、字間や余白に注意しないといけないことを知り（基準の確認）、各自の課題に沿った練習方法を見つける。半紙や書きぞめ用紙を使って学習する時、用紙の中心や文字数に合わせて行の中心をそろえることや余白のとり方を考えて書くことで字配りよく読みやすく書けることを理解する。出来上がった書きぞめを書きぞめ展などの掲示物にして相互評価し合い、これからの書写学習の意欲づけにもつなげていく。

（2）子どもについて

子どもたちはこれまで、「左右」「上下」「たれ」「かまえ」の組み立て方の学習を通して、字形を整えるには部分の形や大きさを考えて組み合わせることが大切であるということを学んできた。また、後期に入ってから平仮名の字形と文字の中心や、漢字と平仮名の文字の大きさのポイントについても学習してきている。本学級の子どもたちは一時間の授業の中で基準を理解し、その時間の課題を自分たちで見つけて解決しようという気持ちも育ってきている。そして自己批評や相互評価を続ける中で少しずつだが書写学習における思考の過程も学んでいる。しかし、基本的な点画の技能の習得には個人差があり、40人近くの学級で学習しているために個別指導に十分な時間が取れないのが現状である。

硬筆でも、ていねいに字形を整えて書ける子と、字のくせが強く文字の組み立て方に注意を払わずに書いている子がいる。普段の学習においても漢字学習やレポート・作文などで字を書くとき、筆圧や字形を意識させ、ていねいに文字を書くように指導を続けている。

(3) 人と関わり自分で課題を解決する力について

教材文字「希望」の試書と教科書を比べて自分の課題を設定する。友達の課題との共通点を見つけ、相互評価などで関わり合いを持ちながらともに解決する。学習したことをもとにほかの文字にも目を向け、硬筆の学習にも生かすことができたとき「人と関わり自分で課題を解決する力」がついたと考える。

①自分で課題を解決する力について

自ら課題に気づき自分の力で解決するために、何も見ないでまず題目の文字を書いてみて（試書）教科書のお手本と比べ、自己修正して直したいところを発見していくという方法を日ごろから取っている。本單元では、「字配りよく」書くためには①文字の大小②中心③字間④余白を意識しなくてはいけないこと、既習の「文字の組み立て方・左右、上下、たれ、かまえ」「平仮名の字形と文字の中心や、漢字と平仮名の文字の大きさ」の学習を思い出し、それぞれの注意点を探り練習方法を工夫すれば解決できるものということに気づかせていきたい。そのために補助線や外形を示したシートや一画一画が表れてくる書写コンテンツなどを使って視覚に訴えて考えさせる。練習の場面でも各自が持った課題を自ら意識して取り組めるよう支援したい。

②人と関わるについて

一人ひとりが自分の試書から自らの課題を見つけ、書いた文字を提示しながら話し合うことで共通の学習課題を持ち、その課題を解決するための方法をともに考えられるようにしたい。練習中の作品やまとめ書きの作品に自己評価だけでなく相互評価も取り入れることで、自己の高まりや次への課題、友達の頑張りに気づき文字学習に対する意欲を高めることにつなげたい。

また、他の教科や総合・特別活動などで手書きの文字を使ってレポートやポスター、手紙などを書くときも書写での学習を生かし、自分を表現し伝え合う力の一つとしていねいに文字を書く姿勢を身につけさせたい。そうすることで自分を見つめ、よりよく自分を表現し人と関わりたいという願いを持つことができると考える。

4. 学習計画 (総時数5時限)

次	ねらい	子どもの意識の流れ	支援と評価
第一次 「知る」 ために書く①	<ul style="list-style-type: none"> ・「字配り」で注意することを調べる。 (関・意・態) (知識・理解) 	<ul style="list-style-type: none"> ・「希望」の試し書きをして、自分の課題を決めよう。 〈字配りよく書くために必要なことは何だろう〉 ・「世界」で調べてみよう。 ・文字の大きさや中心，文字と文字の間，紙の余白などが大切だ。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> 字配りよく書くには・文字の大小・中心・字間・余白に気をつけなくてはいけないんだ。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 試書に赤で自己修正する。 ○教材文字「世界」に中心線や余白の印を入れたものを提示する。 <p>字配りで注意することを確認できる。</p> <p>(発言・ワークシート)</p>
第二次 「解決する」 ために書く②	<ul style="list-style-type: none"> ・「字配り」について知り，毛筆で「希望」を書く。 (関・意・態) (知識・理解) <p style="text-align: center;">(本時)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 〈「希望」を字配りよく書くにはどこに注意すればよいのかな〉 ・ 毛筆の姿勢・筆の持ち方を確認しよう。 ・ 書き順を確かめよう。 ・ 試し書きと教科書を比べて直したい点を発表しよう。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> 文字の大きさや中心・字間・余白に気がついたら「希望」を字配りよく書くことができたよ。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ・「字配り」に気をつけて半紙に「希望」のまとめ書きをしたいな。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 中心線や余白を入れた手本や課題に合わせた練習用紙を用意する。 (関・意・態) (知識・理解) <p>字配りよく書くポイントで自分の課題を見つけ解決できた。</p> <p>(発言，作品)</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 字配りについて理解し，毛筆で「希望」を形よくまとめ書きする。 (知識・理解・技能) 	<ul style="list-style-type: none"> 〈「字配り」に気をつけ，半紙に「希望」のまとめ書きをしよう〉 ・ この前の作品で直したいところはどこかな。 ・ 文字の大小や中心・字間・余白に気をつけて「希望」を半紙にうまくおさめたよ。 ・ 名前も字配りよく書きたいな。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> 自分の課題に気をつけて字配りよく「希望」のまとめ書きができたよ。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ・ 今度は書きぞめ用紙に「希望の春」を書きたいな。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 前時ではできなかったことを思い出させ，拡大手本やコンテンツの動画で字配りについて考えさせる。 (知識・理解・技能) <p>字配りに気をつけ半紙に「希望」を形よく書くことができる。</p> <p>(作品)</p>

<p>第三次 「応用」 するために書く②</p>	<ul style="list-style-type: none"> 書きぞめ用紙に「希望の春」を字配りよく書く。 (関・意・態) (知識・理解・技能) 	<p>〈字配りに気をつけ書きぞめ用紙に「希望の春を書こう〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 「希望」で学習したことを思い出そう。 平仮名は漢字よりも小さめに書くといんだな。 たてに長い紙の中心を取るのは難しいけど、一字一字の中心を考えればできるよ。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>字配りに気をつけて書きぞめ用紙に「希望の春」を書けたよ。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> みんなの作品も見してみたいな。 	<p>○中心線を赤で入れたり書きぞめ用紙を4等分させたりして大きな紙でも字配りに気をつけられるようにする。 (関・意・態) (知識・理解・技能)</p> <p>書きぞめ用紙を使用して「希望の春」を字配りよく書くことができる。 (作品)</p>
	<ul style="list-style-type: none"> 書き初めの作品を互いに見せ合い、自己評価や相互評価をする。 (関・意・態) (知識・理解) 	<p>〈書きぞめの発表会をしよう〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 字配りに気をつけたらたてに長い紙でもバランスよく書けたよ。 これまで学習してきた「文字の組み立て」も生かされているよ。 新年の初めにふさわしい力強い作品に仕上がったね。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>みんなの作品を見合ったよ。今度は自分の好きな言葉を書くのにも挑戦してみたいな。</p> </div> <p>これからもちがう大きさや形の紙に書いてみたいな。</p>	<p>○自己評価や相互評価のポイントを明確にし、めあてに沿ったふりかえりカードなどを用意する。 (関・意・態) (知識・理解)</p> <p>自分や友達の作品についてめあてに沿ったふりかえりができる。 (関・意・態) (知識・理解)</p>

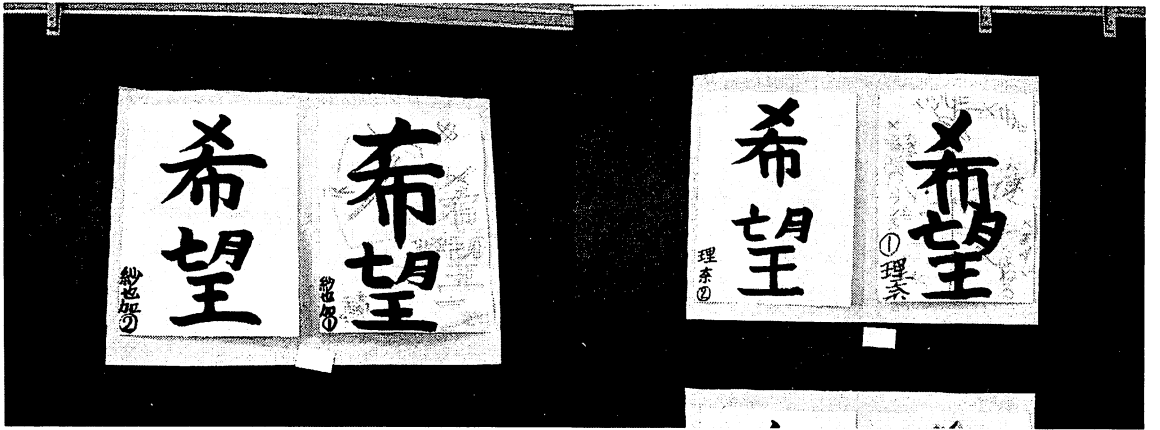
5. 本時の学習（第二次の1時）

(1) 題材 字配りを知ろう〈書きぞめ〉『希望』

(2) ねらい 自分の課題に合った練習方法を決めて毛筆で字配りよく「希望」を書くことができる。
(知識・理解・技能)

(3) 学習活動

学 習 活 動	子 ども の 意 識 の 流 れ	支 援 と 評 価
1. 前時の学習をふり返り 本時の課題をつかむ (5)	○この前の時間はためし書きをしてみたよ。 ・半紙にうまくおさめるには字配りが大切だったよ。 ・バランスがとりにくいな。 〈「希望」を字配りよく書くにはどこに注意すればよいのかな〉	・課題を明確にするために自分のためし書きを見て考えるようにする
2. 字配りの4つのポイントについて理解する (15)	・文字の大きさについて調べてみよう。 ・文字の中心が行の中心になるんだな。 ・外形と字形の関係や左右・上下の余白はどうかな。 ・姿勢・筆の持ち方に気をつけて書こう。	・手本に中心線を入れて考えてみる。 ○字配りについて考えさせるために、拡大手本や映像を使って視覚に訴える。 (知識・理解・技能)
3. 練習をする (15)	・文字の大きさはいいぞ。今日は中心に気をつけて書くよ。 ・部分の筆づかいにも気をつけたいな。 ・練習用紙で練習をしよう。 ・白い紙にも書いてみよう。	・姿勢・筆の持ち方に気をつけて書くよう確認する。 ・各自の課題に合わせた練習用紙を用意する。
4. 今日のまとめ書きをする (5)	・「字配り」について学んだので「希望」を形よく書いてみよう。 ・自分の課題に気をつけて書くよ。 ・ためし書きよりうまくなったぞ。	・比べるために、試し書きと同じように半紙に書くようにする。
	文字の大きさや中心・字間・余白に気をつけたら「希望」を字配りよく書くことができたよ。	
5. ふりかえりと自己評価をする (5)	・ためし書きと比べてよくなったところを見つけよう。 ・教室の友達のよくなったところはここだよ。 ・今度は真っ白な紙に「希望」を字配りよく書きたいな。	自分の課題に合わせて字配りよく「希望」を書くことができる。(作品)



研究協議会 I 記録

公開授業を受けて授業整理会

助言者	地下 雅志	指導主事	(金沢教育委員会学校指導課)
司会	石野 昌子	先生	(金沢市立扇台小学校)
記録	寺井 純子		(珠洲市立蛸島小学校)

◇授業者(柿木千鶴先生)より

- ・ 書写の時間は、一人ひとりが自分の課題に向かって静かに過ごす時間という思いで取り組んできた。
- ・ 以前、高学年を担当したときに、墨をすった経験のない児童がたくさんいたことがあったので、墨をする経験をさせてきた。しかし夏の時期に、何の関係か墨が薄くなりじんでしまったことがあるので、最近墨を少しすった後に液体墨を入れるようにした。
- ・ 人数が多く、インフルエンザの流行もあり、今回全員そろって授業ができよかった。

◇参観者より

- ・ 真面目に静かに取り組んでいた。
- ・ 「どこに気をつけて書けばいいのか、考えて待つ」という指示が行き届いてよかった。
- ・ たくさんの練習用紙が用意されていてよかった。
- ・ 姿勢、ひじを上げる、筆の持ち方などの指導もよい。
- ・ 児童の作品が1回目と2回目の変化が見られてよかった。
- ・ パソコンは流し続けられており、児童がいつでも確認することができたので、よかった。
- ・ 教師の生の範書もあれば、よかったのではないかな？
- ・ 課題を持つことが大切である。そのためには、前時に書いた①の作品を本時の初めに使用したほうが、本時の課題が明確になったのではないかな。
- ・ 書は取り組むごとに、課題が変わるものであるなので、自分の中にある課題が表れるようにするとよい。
- ・ 教室は、学ぼうとするよい雰囲気であった。
- ・ 教師は笑顔で児童の前に立ってほしい。
- ・ プリントの始筆にとらわれていた子が多かったので、一画一画を大切に書いていた児童を取り上げて、教室にそのよさを広められればよい。
- ・ 足を床につけて、踏ん張って書くという姿勢は大切である。
- ・ 筆の持ち方は、小学生の場合は、鉛筆の持ち方を一致させるとよい。小学校では、硬筆を上手に書くための毛筆である。形の整え方などを毛筆で学ばせることが大

切である。

- ・文字を機械的に紙におさめるのはよくないので、紙を四角く折って書かせないほうがよい。

◇助言

- ・細やかで丁寧な大変素敵な授業をしていただいた。
- ・筆の持ち方について
鉛筆の持ち方100パーセントきちんと持たせようとしている学校もある。最近の日本人は、不器用になっていると言われていたが、筆の持ち方というのは、手先の器用さの大元になっているのではないかと思う。それくらい大切なことだと思う。
- ・教室環境について
壁面にこれまでの指導の足跡が残されており、細やかさを感じることができた。
子どもたちも字配り、文字の大きさと位置が関係することをしっかり理解しており、今までの丁寧な学習の成果が表れていた。
- ・授業の支援について
補助線入りの練習用紙など、何種類も用意されていた。
支援コンテンツの使用により、理解が深まっていた。このときに、字配りの指導ができたのではないかと思う。
- ・児童について
児童が学習の見通しを持って授業に取り組んでいた。
これは、授業の中で主体的に学習に取り組むために必要なことである。また、児童が自分自身の判断材料を持っていたということである。

中 学 校 授 業 公 開 報 告

1年1組 国語科（書写）学習指導案

平成21年12月2日5限

場所 1年1組教室

指導者 八田 和幸

1. 単元名 四 行書を知ろう

2. 目 標 毛筆で書き初めをする。文字の大きさや配列・配置に気をつけて行書で書くことができる。

3. 指導にあたって

(1) 教材観

新学習指導要領では、書写は「**伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項**」の(2)に組み込まれることとなった。ちなみに第1学年の目標は以下の通りである。「ア 字形を整え、文字の大きさ、配列などについて理解し、楷書で書くこと。イ 漢字の**行書の基礎的な書き方**を理解して書くこと。」

このことは、小学校第5学年及び第6学年の目標の中の「ア（前段省略）～**書く速さを意識して**～」「ウ 毛筆を使用して、穂先の動きと**点画のつながりを意識して書くこと**」を、より発展させて、設定されたものである。

そして、書き初めは、伝統的な言語文化の最たるものであり、かつ中学校第1学年で学んだ行書の基礎的な書き方をまとめる学習の場ともなる。知識として学んだ行書の5つの特徴を理解するだけでなく、実際にどのように書けば、その特徴を生かした書きぶりになるのかを押さえながら、学習を深めさせたい。

(2) 生徒観

男子16名、女子15名、計31名のクラスである。ほとんどの生徒が、教師サイドを信頼し、またこちらからの信頼に応えようとする気持ちも多分に持ちあわせている素直な生徒が多い。書写に関しては率直に字が上手になりたいと思っている生徒が大半である。どの生徒も熱心に取り組む。一部のやや消極的な男子の態度改善と、更なる生徒同士の信頼関係の幅を広げる意味でも、この書写の授業を活用したい。

(3) キャリア教育にかかわる具体的な取り組みについて

書き上がったものを見て行う相互評価ではなく、書いている最中の書字活動を見合う相互評価を取り入れる。また、互いに教え合う活動を取り入れることにより、立場を変えて、教える側も経験することで、自らの書字活動を振り返ると同時に、互いのコミュニケーション能力も高めたい。

4. 指導計画（総時数13時間）9月～1月

第1次 楷書と行書を比較して、行書の特徴と行書学習の意義を知り、楷書と行書の筆使いの違いを確かめて毛筆で書く。教師による手取り法を行う。（2時間）

第2次 行書の特徴と筆使いを理解して毛筆で書き、硬筆で書いて確かめる。比較的上手な生徒を指名し、師範代役として教師の補助を手取り法でしてもらう。（4時間）

第3次 好きな言葉を選び、行書のいろいろな書き方を理解して毛筆で書く。（2時間）

第4次 これまでの学習を生かして書き初めを書く。（本時3／3時間）
①書き初めの意義の説明を聞く。CD-ROMを見て、行書の書きぶりのイメージを持つ。
②筆使いを中心に「世界」または「遺産」の部分を半紙で練習する。最後に「世界遺産」を書き初め用紙に試し書きしてみる。
③（本時）まとめ書き（配置配列に気をつけて書く。特に文字・行の中心、字間、太細、文字の大きさのバランス、名前の添え方等の観点を加えて）

第5次 学習を生活に生かし、さまざまな書式に書く。（2時間）

5. 本時の学習（第4次中の第3時）

(1) 題材名 書き初め 毛筆「世界遺産」

(2) ねらい これまで学習してきたこと（行書の特徴的な筆使い）を生かし、配置・配列を考えながら、書き初め用紙に書き入れることができる。

(3) 本時の評価項目（および方法）

〔関心・意欲・態度〕

・行書の特徴を理解して意欲的に、書こうと取り組んでいる。（観察）

〔言語事項〕

・配列・配置に気をつけて、行書「世界遺産」を書いている。（まとめ書き）

(4) 学習過程

主な学習活動と内容	時間	指導上の留意事項（☆評価基準★支援）
1. 前時に試書したものと、教科書の拡大手本を見直し、本時の課題をさぐる。	5	・「世界遺産」の文字から、行書の特徴を確認してゆく。単に教科書との形の比較だけではなく、なぜそうなるのか、を説明する。
これまで学習してきたことを生かし、「行書の筆使い」を駆使しながら「配置・配列」を考えて、書き初め『世界遺産』を書こう。		
2. 二人一組で、 書いているところ を見せ合い、うまく書けている所と改善したらよい点を、ワークシートを手がかりに、指摘し合う。 改善したらよい点を、具体的に、書いてみせるか、手取り法でやってみせることによって、教え合う。 教えてもらった方は、改めて今日の自分の課題を考え、決める。	20	・ワークシートの配布 ・友達の書くところをしっかりと見て、うまく書けている点を見つけることができる。その上改善したらよい点をアドバイスすることができる。 （コミュニケーション能力） ☆【関心・意欲・態度】（観察）
3. 教えてもらったことを踏まえて、自分はどこまでのレベルにチャレンジするのかを決め、各自の課題解決に向けて、書き初め用紙に、まとめ書きをする。	15	全員がクリアして欲しい課題 ① 行書の筆使い （適度な速さ、何筆で書くことができたか、筆脈に気をつけることができたか） ② 文字の中心 を意識してそろえることと、バランスによる 行の中心 を意識すること。 発展（挑戦）課題 ③字間・余白 ④文字の大小のバランス ⑤線の太細と勢い・気迫 ⑥名前の入れ方 ★行書の筆使いと自分の課題との両方に気を配りながら書くことを呼びかける。 ☆【言語事項】（まとめ書き）
4. 自己評価を行う。	5	ワークシート
5. 後かたづけをして、次時の確認を聞く。	5	

6. 今後の課題

複数の課題を同時に意識することができるか？

さらに上達するために 書き初め「世界遺産」チェックポイント

※今日の自分の課題に大きく○印を(複数可)

1年 | 組 | 番・氏名 T. S

友達はそれに対して、書いてあることを参考に、評価とアドバイスを！！

レベル1 (ここまでは全員が習得しよう)

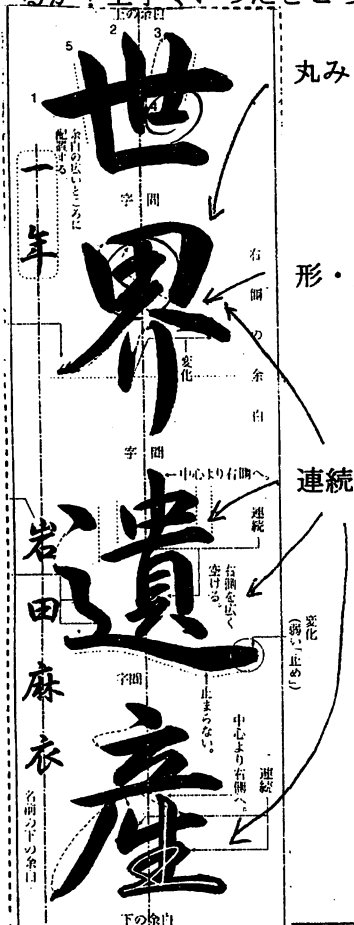
自分の評価

友達 (K) さんの評価

①行書らしい、やわらかい筆使いができてい
るか？上手くいったところ・良いところに○

まだだ もう少し よい うまい
1 - 2 - ③ - 4

まだだ もう少し よい うまい
1 - ② - 3 - 4



主な改善点は？

- ・行書の書きぶり (筆の使い方) を、どの部分で使うか、知識として理解する。
- ・筆をやわらかく持つ
- ・肘を上げる、左手で紙を抑える、背筋を伸ばすなどの姿勢を整える
- ・筆を運ぶ速さにメリハリとリズムをもたせる。
- ・“思い切り書く”ため集中力や気持ちを高める。

あれば(その他詳しく具体的な)アドバイス!

- ・4文字を書き終えるまでに、筆を直した回数は？

8回
4回以内にして!!

レベル2

②行の中心が通って見えるか？

まだだ もう少し よい うまい
1 - 2 - ③ - 4

まだだ もう少し よい うまい
1 - ② - 3 - 4

主な改善点は？

- ・用紙の中心・文字の中心を意識する。
- ・紙面における文字の外形・大小をつかむ。
- ・文字の書き出しの位置に気をつける。(最終面の終筆と始筆の位置関係をつかむ。)
- ・重心のバランスを考えて、真ん中に書かれているように見えるようにする。

アドバイス!

「遺」という字の位置をもうちい
中心に書くといい。

レベル 3 ここからは発展課題

③ 字間（文字と文字との距離）や余白が適切にとれていて、用紙にうまく収まっているか？

まだまだ もうちよいよい うまい
1 - 2 - ③ - 4

まだまだ もうちよいよい うまい
1 - 2 - ③ - 4

主な改善点は？

- ・文字の高さを変える。
- ・文字の外形をつかむ。
- ・紙の幅や高さを意識して書く。

アドバイス！

なし

④ 文字の大小のバランスがとれていて、全体として、まとまって見えるか？

まだまだ もうちよいよい うまい
1 - 2 - ③ - 4

まだまだ もうちよいよい うまい
1 - ② - 3 - 4

主な改善点は？

- ・それぞれの文字の外形や大きさの役割を考えている。
- ・文字の高さ・幅を変えてみる。

アドバイス！

「界」と「遣」が大きいと思う。

⑤ 線に、太い・細い（強い・鋭い）のメリハリがあって、勢いのある、気迫のこもったものになっているか？

まだまだ もうちよいよい うまい
1 - 2 - ③ - 4

まだまだ もうちよいよい うまい
1 - 2 - ③ - 4

主な改善点は？

- ・どの画を太く強調するかを考える。
- ・どの画を細く鋭くするかを考える。
- ・筆の立て方（突き方・引き方）を工夫する。

アドバイス！

なし

⑥ 名前が、本文を引き立てるような適切な位置・大きさ・書体で入っているか？

まだまだ もうちよいよい うまい
1 - 2 - ③ - 4

まだまだ もうちよいよい うまい
1 - ② - 3 - 4

主な改善点は？

- ・十円玉などを置いてみて、書く前に名前を入れる位置を、確認してみる。（余白の中央に書かれているか？本文の点画とかぶって、邪魔していないか？縦に間延びしていないか？）
- ・本文に合うような書体で書く。

アドバイス！

もうちよいかんこよく。

今日の学習について（感想）

自己評価（総合）

18 / 24点

友達の評価（総合）

14 / 24点

1年2組 国語科（書写）学習指導案

平成21年12月2日5限

場所 1年2組教室

指導者 平山 洋之

1. 単元名 四 行書を知ろう
2. 目 標 毛筆で書き初めをする。文字の大きさや配列・配置に気をつけて行書で書く。

3. 指導にあたって

(1) 教材観

新学習指導要領では、書写は「**伝統的な言語文化**と国語の特質に関する事項」の(2)に組み込まれることとなった。ちなみに第1学年の目標は以下の通りである。「ア 字形を整え、文字の大きさ、配列などについて理解し、楷書で書くこと。イ 漢字の**行書の基礎的な書き方**を理解して書くこと。」このことは、小学校第5学年及び第6学年の目標の中の「ア（前段省略）～**書く速さを意識して**～」 「ウ 毛筆を使用して、穂先の動きと**点画のつながりを意識して書くこと**」をより発展させて、設定されている。

書き初めは、伝統的な言語文化の最たるものであり、かつ中学校第1学年で学んだ行書の基礎的な書き方をまとめる学習の場ともなる。知識として行書の5つの特徴を理解するだけでなく、どのようにすればその特徴を生かした書き方ができるかを考えさせたい。

(2) 生徒観

男子16名、女子15名、計31名のクラスである。たいへん活発に発言をする生徒が多く授業は進めやすいといえるが、自由な発言も多いため、賑やかになりすぎる場面もある。一部集中できない生徒もいるが、良い雰囲気ですべて学習に取り組んでいる。

行書は中学一年で初めて学ぶため、単なる「つなげ字」と理解している生徒が多かったが、筆使いを知ると学びを活かして書くことができるようになった生徒が増えてきた。

(3) キャリア教育にかかわる具体的な取り組みについて

書き上がったものを見て行う相互評価ではなく、書いている最中の書字活動を見て、教え合いの場面を取り入れる。能力の向上のためには、周囲の意見を受け止めて行くことが大切である。教える側も教えられる側も同じクラスの仲間といった立場であるが、教える側は自らの書字活動を振り返ると同時にコミュニケーション能力も高め、教えられる側は、相手を信頼し自らを高めていけるような活動としたい。

4. 指導計画（総時数13時間）9月～1月

- 第1次 楷書と行書を比較して、行書の五つの特徴を知る。自分の名前を硬筆で書き、行書の字形をつかむ。(1時間)
- 第2次 行書の筆使いを理解し、さまざまな字に応用できるようにし、毛筆で自分の名前を書く。筆使いが比較的良い生徒を師範役として選出する。(3時間)
- 第3次 第2次で学んだことを活かしつつ、具体的な筆使いを理解しながら書く。(4時間)
- 第4次 これまでの学習を生かして書き初めを書く。(本時2 / 3時間)
 - ①試筆 筆使いに注意して書く(2時間) (①中の2時が本時)
 - ②まとめ書き(文字・行の中心、太細、文字の大きさのバランス、名前の書き方などの観点を加えて)(1時間)
- 第5次 学習を生活に生かし、さまざまな書式に書く。(2時間)

5. 本時の学習（第4次中の第2時）

(1) 題材 書き初め 毛筆「世界遺産」

(2) ねらい これまで学習してきたことを活かし、筆使いを意識して「遺産」を書くことができる

(3) 評価

〔関心・意欲・態度〕

・行書の特徴を理解して意欲的に、書こうと取り組んでいる。(観察)

〔知識・理解〕

・点画の丸み・方向や形の変化・連続を理解している。(自己評価表)

〔言語事項〕

・「遺産」の課題で示した筆使いを理解し書いている。(まとめ書き)

(4) 学習過程

学 習 活 動	時	指導上の留意点 (☆評価基準★支援)
1. これまで用いてきた「丸み」「方向・形の変化」「連続」の三種の筆使いを確認する。	5	
「丸み」「方向・形の変化」「連続」を意識し「遺産」を書こう。		
2. 半紙に1文字ずつ「遺産」を行書で試書する。	5	<ul style="list-style-type: none"> ・黒板には楷書の「遺産」をはる。 ★「丸み」「方向・形の変化」「連続」は、どこに用いるのか自分で考えながら書くよう指示する。試書は自己評価の際に比較対象として使用するので、捨てない。
3. 「遺産」の手本と自己評価表を配付する。試書と手本を比較し、試書の段階でどれだけできているか自己評価する。	5	<ul style="list-style-type: none"> ・自己評価ポイント(課題) 「連」①2画目と6画目の丸みが表現できたか。 ②8～12画目の連続ができたか。 ③しんにょうの「止め」ができたか。 「差」④2～5画目の連続ができたか。 ⑤9～11画目の縦画から横画への連続ができたか。
4. 「遺産」を練習する。三人一組とし、うち一人を師範役とする。練習中に各グループの師範が書いているところを見、3での課題についてアドバイスなどを行う。	12	<ul style="list-style-type: none"> ・[師範役の生徒] 友達の書くところを見て、修正したらよいところなどをアドバイスすることができる。 ・[教えられる側] 不明な点や課題を自覚し、師範に質問したりできる。(コミュニケーション能力) ☆【関心意欲態度】(観察)
5. アドバイスをもとに課題解決に向けて、まとめ書きをする。(半紙1枚に2文字)	13	<ul style="list-style-type: none"> ★アドバイスを理解したことをよく思い出すこと、慌てずに書くことを留意させる。 ☆【言語事項】(まとめ書き)
6. 試書とまとめ書きを比較し、自己評価を行う。	5	<ul style="list-style-type: none"> ★本時の目標に沿った評価ができるように助言する。
7. 次時の確認を聞く。	5	

6. 今後の課題

筆使いの課題を5つに絞ったが、その他の筆使いの習熟をどうするか。

7. 授業を終えて

はじめは手本を見ず、試書をする形を採った。「遺産」だけでなく、他の文字でも同じことを行っていたため、「この文字なら行書ではこうなるだろう」といった筆使いの予測がある程度できるようになってきたようだ。

(1) 師範役について

今回はグループで学習を進め、グループには一人「師範」を設けた。第二次で自分の名前を行書で書き、その際比較的筆使いがよく出来ている者を師範とした。グループの人数があまり多くなると師範も大変なので、三人一組十グループが適当と考えたが、上級者を十人選出するのが困難であった。しかし筆使いはさほどではないが、リーダー性を比較的備えた生徒も師範とすることによって十人確保することができた。なお、グループ編成は個人のレベルに配慮し教師側が行った。

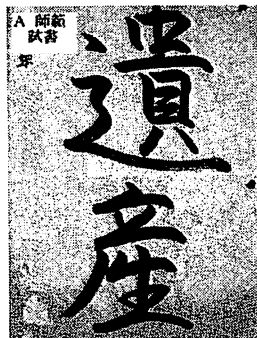
師範といっても文字、筆使いを教えることが難しいことが想像できた。したがって授業の中では師範の「教え方」をレベルアップ出来るようにつとめた。段階は①手本と比較してのアドバイスを②自分で書いてみせる③手取り法を行うの三つである。最終的に③が出来るようになればよいが、特にそのことを師範の目標として設定はしていない。

(2) グループ学習と自己評価

授業の課題を「丸み」「方向・形の変化」「連続」を意識し「遺産」を書こうとした。試書の段階でみな真剣に取り組み、「遺産」の行書を頭で構築しながら書くことが出来ていたようだ。

グループ学習では、師範が指導、アドバイスしているときに、もう一人の生徒が師範の見方になるといったような場面もみられた。教師の指導以上の説得力も生まれ、効果的であった。

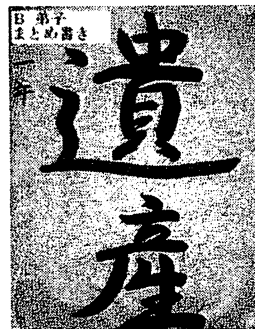
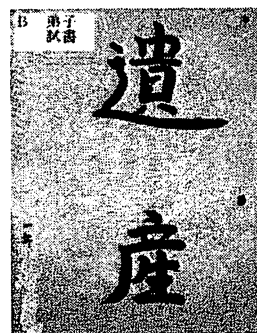
自己評価として自分の試書とまとめ書きを比較する方法を採った。師範から見ての評価も取り入れ、相互評価も出来るようなワークシートを準備したが、時間がとりにくく、今回の授業ではうやむやになってしまった。



A 師範 (女)

試書(左)とまとめ書き(右)

※試し書きは半紙二枚



B 弟子 (女)

試書(左)とまとめ書き(右)

※試し書きは半紙二枚

(3) 生徒の思い

1年生で初めて行書に触れ、戸惑うことも多かったようであるが、おおむね楽しみながら学習できていたようである。第5次を終えた際、行書を学んでみての感想を書かせた。以下、いくつかの生徒の感想を紹介したい。

・男（師範）

行書を学んで最初に思ったことは、字の形が少し違ったり、連続で書くなどのいろいろな特徴があってめんどくさい字だと思いました。でも、書いていくとだんだん行書で書くとおもしろいと思うようになっていきました。

ぼくは、初めて行書で字を書いたのに師範に選ばれておどろきました。最初は不安だったけど、班のみんながちゃんとやってくれたのですごくやりやすかったです。

ぼくが一番難しいと思った字は「遺」です。大きくなってしまってバランスが難しいと思いました。

・男

はじめは下手でしたがだんだんやっていくうちに上手になってきた気がします。行書ではなくても毛筆はむずかしいのに、行書はさらにたいへんでしたが、たくさん書くことによって慣れてきました。

今日で書写は終わりましたが本当に楽しかったです。これからの書写もたのしみです。

・男

行書は汚い字だと思っていましたが、意外と奥が深いと思いました。試し書きの行書は手本と全然違って驚きました。でも実際行書は使わないので、必要ないのかなあとも思いました。

授業では、グループでやるのがよかったと思います。師範のアドバイスとても字が良くなったと思います。またこんな機会があったらやりたいです。

・女

国語の時間が書写と聞いたとき、とてもいやでした。小学校のときからいやな授業のひとつでした。手は汚れるし、いやでしかたなかったです。しかも行書でした。

でも授業をやってみると、いろいろな文字が行書になって格好よくなった感じがしました。行書はむずかしいところがありましたが、とても楽しい授業でした。

・女（師範）

私は行書など書いたこともなかったし、毛筆で楷書もしっかりと書けないから書けるか心配でした。初めて行書を書いたときは、すごく難しくて自分の名前も書けないのに、教科書の文字は書けないのではないかと思いました。さらに、私が師範にえらばれて驚きました。私よりも生徒役のほうがきれいに書けていたのすごく困りました。でも、師範をするのはすごく楽しかったです。

(4) 今後の課題

試書とまとめ書きを比較すると、ほとんどの生徒に何らかの成果があったように思う。また、(2)でも触れたように、教師の指導以上の説得力も生まれ、効果的であったのではないか。

この方式は、生徒間の教え合いが中心となるため、グループ学習に入る前の教師側の働きかけをさらに工夫し、効果的なものにしていく必要がある。

また、最終的には、実生活において毛筆で得たことを活かすことが出来るようにしたいが、「書写」を離れると、ていねいに書こうという意識が薄れてしまう。日々の授業における意識付けを、充実したものにしたい。

研究協議会Ⅱ 記録

公開授業Ⅱについての授業整理会

七尾市立田鶴浜中学校 東間 郁子

◇授業者より

1年1組 八田 和幸先生

- ・前回の授業では、床で書く方が良いと言ったが、本日は女子が机の上が良いと言
い、机で書いた者もいたが、机は段差があった。そんなことも、考えなくてはな
らなかった。
- ・子どもたちの教え合いで、授業ができないかと考えた。体育でも、逆上がり、跳
び箱などで教え合ったりしているので、書写でもできないか。手取り法でできな
いかと考えた。最初は、教師が。次は、上手な生徒が。そして、隣同士で行った。
前日は、楽しくやっていたが、今日は緊張していた。男子でやっていない生徒が
いた。
- ・助言はできたが、評価表を書くことは難しかった。
- ・プリントに書いてあることが多く、読むこと、書くことがあって難しかった。
- ・生徒作品は、前日の方が良い物もあった。
- ・時間を言い過ぎたため、落ち着いて書けなかった。
- ・今日は、修正できた。

1年2組 平山 洋之先生

- ・自分自身、緊張していた。
- ・生徒は、良くやっていた。
- ・試書とまとめ書きでは、格段の差がある。
- ・生徒たちの教え合いということで、師範役の生徒が教える。手取り法は、うまく
いかず一度だけ行った。
- ・今日も割と良くできていた。
- ・時間配分、段取りが悪かった。
- ・試書と比較する。師範役の生徒が評価することになっていたが、二種類の筆記用
具があって、時間がなくなり、まとめがうまくできなかった。

◇質疑応答より

- ・手本を超えるとは、お手本どおりに書こうとすると、萎縮してしまうところがあ
るので、お手本よりうまく書けるところは書いてみようと言うと良い。
- ・お二人の授業が同時にあり、お一人ずつ見たかったと思ったが、時間の都合でし
かたなかったところもあったのでしょうか。
- ・指導者としては、ご苦勞なさっていた。生徒たちも楽しくやっていた。かわいい
生徒さんと先生との一体感があった。
- ・生徒たちのやっていることから、指導者は、楷書と行書の違いをわかっておかな

ければならない。

- ・小学校では、楷書をずっとやっていた。中学校では、ほとんど行書をやる。
- ・潤墨についても、指導が必要である。
- ・執筆法についても姿勢が大切である。国語科での指導が必要である。
- ・楷書と行書の違い（点画を集めて、点画の流動化）、指導者が知っていなければならない。
- ・筆順も、一つとは限らない。「遺」の行書、草書では、筆順が変わることがある。授業で触れることはないが、違うやり方もあることを知っておく。違うと言っはいけない。
- ・筆をうまく運ばないと流動性が出てこない。一点一画、墨をつけていたのでは、行書は書けない。潤墨、どうあろうが一字書く。筆の運び、線のねじれを考えないといけない。生徒にわからせる。
- ・「世界遺産」の「遺産」だけ扱っていたが、書かせた紙の大きさが違う。半紙に書かせたい場合、折って、相似形にする。紙の形は、合わせれば、もっと効果的である。
- ・行書を書く場合、字一字書いても、次に応用できるものがある。
- ・字形の問題、「世界」の両方の縦画、平行であってはおかしい。教科書体、明朝体では、横画を縦画で割ると、左右対称になる。
- ・「界」垂直になっていない。縦線が長いときは、すぼまる。
- ・「遺」→「貝」
- ・原則を教えてやる。
- ・小学校の毛筆書写は、硬筆が上手になるように指導している。
- ・行書には、連続線があるが、中学校では、頑固ではない。
- ・文字の配列、字を書いているのではなく、言葉を書いている。字間が空きすぎる。教科書にも、間違いがある。
- ・本文は、紙幅の中央に書くが、生徒は、右寄りに書いている。名前も、残りの中央に書く。
- ・余白の問題もある。
- ・「世」の横につないだ線。
- ・いかに効率よく指導するか。
- ・中学校、小学校の楷書の違い。小学校では、一画、二画は、つなげてある。中学校では、一画、二画は、少しあけてある。楷書でありながら、速く書けるようにしてある。なんのために空けてあるかが、ポイントである。
- ・せっかく行書で書くならば、自分の名前ぐらいは、硬筆でも練習しておく。書写のみでやるのではなく、関連させておく。
- ・生徒たちは、活字の影響か、原則を教えても、なかなか直らない。教科書活字では原則通りになっているのに、明朝体ではそうでないものがあり、生徒はなかなかできない。

- ・連続に横線があった場合、全部平行にしてはいけない。活字は、平行になっている。
- ・右手で書くから、右上がりになる。しかし、平行にならない。下がることはない。全体としては、こちらに重きを置けばよい。

◇助言者より

- ・新学習指導要領に基づいてお話しします。
- ・お二人の先生は、生徒たちの教え合う場を取り入れたいと考えられた。しかし收拾がつかなくなるからとか、時間の関係でなかなかできない。
- ・お二人の先生は、ここはこうしたほうが良いというアドバイスがあった。お手本と、自分の書いたものと比較しながら、相手に伝えるというのは、大切な部分。そう考えて、教え合いの場を設定され、取り組まれて、一つの方向性が見出された。
- ・一時期、精神集中、静かに書くことが大切だと言われてきたが、こんな方法もある。
- ・相互評価、自己評価も入れていたのは良い。何と何を比べて評価するのか、試書したものと今書いたものを比較させる場面なのか、しっかりと一時間一時間の中で、評価していくことが大切である。
- ・筆記用具を替えて、書くのは、時間のロスというのはわかるが、評価が大切ならば、そこに時間をかける。評価のポイントを絞ることも大切である。
- ・新学習指導要領では、教科の言語活動が大切だと言われているが、本時の領域は、中核的役割を果たす。
- ・硬筆でも書けるようにというのは、授業でも欠けていたところではないか。
- ・話す・聞くの領域で、メモを取るときは、どんな字体で書かなければならないか。生徒たちから、行書の必要性が出てくれば良い。
- ・毛筆による筆の柔らかさ、弾力性が出ると良い。
- ・小学校、中学校で学んでいき、高校へのつながりが求められている。
- ・現行と新学習指導要領を比較して、今後、何を指導していかなければならないかを考える。

◇まとめ

- ・1年2組の生徒が、「先生、時間延長してください。」と言ったが、もっとやりたいということ。意欲的だなと感じた。次回もやりたいんだと感じられた。これが、今日の授業の成果ではないか。

講演録

演題

『石川県書写書道教育連盟設立と書写書道教育の将来

—人間が人間になること・文字を手書きすること—

講師 法水 光雄先生

石川県書写書道教育連盟相談役
福井大学教育地域科学部教授

まずは、20回重ねられましたこと、人間ならば「成人式」でございます。まことにおめでとうございます。私も感無量であります。改めてお祝い申し上げ、今後とも力強い歩みをご期待申し上げます。

連盟創設にかかわった一人として、「成人式」を迎えた連盟の将来のために現在の先生方に創設当時のことを話させていただいておくことは、私としての責任であり無駄なことではないように思い、寄せていただきました。

また、このたびの新指導要領において国語科書写の扱いが示されましたが、中学校の国語科の中での書写にあてられる授業時数が一年生では減少、二年生がほぼ倍増されたことが幼保・小・中・高・大及び特別支援学校の連携一貫指導内容の中でどう考えるかなどいくつかの課題が生じています。

それから、社会環境・教育環境・文字環境に大きな変化が起きているように思えます。「人間喪失（失格）時代」から「人間死滅化時代」へと指摘する方もあります。

こういう状況の中で“手で書くこと”が本当に人間づくりに力になるのか？とかなり深刻に考えたことがあります。

今現在は、手書き文字（書字）が人間生活に是非とも欠くべからざるものとして、後世に大切に正確に伝えねばならぬと思っています。

そう思い至れたのは、3つのことがあったからでした。

- (1) 新中国成立以来、伝統的な教育のうち切り捨てられたものと継承され残されてきたもの（有用なもの）とがありますが、書法教育は残されました。その理由は郭沫若先生の『『人民教育』（1962<昭和37>）の題詞』にかいま見ることができます。「小中学生の好い字を書く能力を育成するということは、必ずしもすべての人を書家にするということではない。それは、文字を一定の規格にもとづき、端正に、読みやすく書く力をつけるということである。文字をこのように書く習慣をよく身につけると、生徒は注意深くなり、集中力がつき、思いやりの心が育てられる。そそっかしく字を書くと、性格がおおまかになり、独りよがりになり、誤りにも陥りやすい。文字を練習すると、次第にこうした性格的欠点が改善されるのである。ただし、専門の書家になるためには、別途の高度な練習が必要なのであって、これは小中学生に対して普遍的に要求すべき内容ではない。」と署名し結ばれている。< _____ , _____ 共に筆者による >

文字を練習することによって、_____の3つの性格的な欠点が、_____の3つのように改善されるというのである。国語科書写と芸術科書道を2つに見るのではなく“手書き文字（書字）”として全一的に考えられているように、私には思われて“小中高連携”考察に力を与えてもらえそうで感動的なめぐり合いでした。

- (2) 一般ある女の方が、ガンでなくなった母が残してくれたものですがと、かなり古めかしい大学ノートを見せて下さいました。約50年間膚身はなさず、お母さんの姿見（形見）として大事に大事に持っておられたのでしょう。残してやれる財産はないが、母親として3人の子供達に思いのうちの願いや祈りを書きとめておきたい、ありったけの会話をソツと書きとめておきたい——そんな感じがノートの文字から伝わってまいります。家族内外の見舞ってくれた方々の名前・様子や乳ガン宣告をうける前後の不安げな様子が他人の私にもヒシヒシと伝わってきて、50年をこえて赤の他人の私がおの方に会っていて語りかけられている気持ちになりました。不安げなときは、小さく

小さく不安げに。「神も仏もあるものか」と大きく大きく激しく。三人の子供にソツと語り残しておきたい。ときにはやさしく、限りなくあたたかく。この方は、こんなお母さんに見守られ続けて幸せだなあと感じたことでした。お金や土地などよりはるかに素晴らしい遺産！

“書は音楽性と建築性の中間的存在である。”と、たしか西田幾多郎先生がそんな風におっしゃっていたように思いますが、このお母さんの心からの願いが、まるで1曲の音楽が奏でられるように、3人の子供たち1人1人にささやき書かれているのではないか!! 死後50年たっても、おかあさんの心が生き生きといつまでも新鮮に輝き続けるであろう。きっとボロボロになっても、新品のノートでありつづけるだろう。——そう思うと、体中があつくなったことでした。ところで、先生方は小・中学校の教科書を今もお持ちでしょうか。〈へんなことを聞いて恐縮です〉

これは、人間が人間として、親が親として子に語る、ありつたけの心が確かに後世（次の世代）に伝わっている。間違いなくお母さんの心が1曲の音楽（序波急）のごとく奏でられ、1つ1つの文字が組み合わせられて世界が建築されている。確かに“手書き文字”は、印字（印刷文字）や電字（電子文字）よりも、人間が自分の信ずる心を素直に、自分の命のままに伝えることができ、自分の心を自分で確認することが確かにできる——他人にしゃべってもらえなくても——そう思えたのでした。人間が人間として人間になっているか、そう歩んでいるか？という静かな問いかけを聞くことでもありませんか。

(3) 昨年、ある小学校の創立記念行事に、ある方が宮沢賢治の「雨ニモマケズ」を揮毫した額を寄贈して今の子供たちに是非読み親しんでほしいと思うのでと依頼をうけ、何とかお渡しすることができました。はじめはその任に苦慮しましたが、校長先生などの熱心さに助けられ揮毫させていただき、くりかえし書かせてもらったことで賢治の手書き文字の語りに感動できたことです。

改めて、『複製近代文学手稿100選』（日本近代文学館編 二玄社）所収の「雨ニモマケズ」を紐とき、『定本宮沢賢治全集』（新旧）などを合わせ参照しながらの重い歩みとなりました。

まずは、お手元に宮沢賢治の「雨ニモマケズ」。手書き文字です。これを出していただけますでしょうか。今度の指導要領で手書き文字に関して、文言が前回と変わっておるように思います。また、詳しくは申し上げる時間がございませんし、またいろんな場所でご指導いただけることと思います。で、手書き文字がこれだけの文字環境の中で窒息死しないのかという、これが私の素朴な疑問でありました。

実は、「雨ニモマケズ/風ニモマケズ」、これだけしか知りませんでした。恥ずかしいんですが。

最初は、お断りしたいと思っていたんですが、今はその縁をいただいて良かったなと思っています。なぜならば、亡くなった宮沢賢治が今でも語りかけてくれるような、宮沢賢治の人間性がほんとに尊く響いてくるような気がいたします。八木重吉の言葉で言うと、「秋のあまりの静かさに耐えかねて琴の音が鳴り出すだろう」、というそんな感じであります。

「雨ニモマケズ/風ニモマケズ」の顔つきと語り口調と、それから、「雪ニモ/夏ノ暑サニモマケヌ」、それと、「丈夫ナカラダヲモチ」、そして、すとんと変わります。「慾ハナク」。私はこの「慾」っていう字を見ると良寛さんの人柄を想起いたします。「慾ハナク」、きっと欲は無かったんだろう、あるいは、それを強く願ったお人だろうと思います。その全く欲心のない「慾」一字と、最後の、これは学校では宗教的な用語はいけないってことですが、教科書にはこの「南無妙法蓮華經」っていうのは一切出てきてないように思うんですが、これはやっぱり一緒に拝見すべきだろうと思っています。この「南無妙法蓮華經」の面構え、語りっていうんでしょうか、それから、この文字を見てるだけで背筋がしょんと立ってしまう力を賢治のこの文字（書）が持っている、私は思います。こういう語りが出るお人が、宮沢賢治っていうふうに思いますと、すこぶるたいへんな人なんだなあと、惚れるって言ったらおかしいでしょうか、愛すべき人柄を持ったお方、こんなふう思うんであります。「慾」、この一字では

んとに良寛さんの人柄を彷彿とさせていただきます。こんなふうになれるといいなあ、と思われるわけです。

それから、「(慾) ハナク」とまた変わるわけでありませう。そうすると、賢治の心が聞きやすいであります。それが手書き文字ではないのかと思います。そして、「決シテ」、また変わります。それから「瞋(イカ) ラズ」、余程、心をこめて書いていらっしやいます。自分に言い聞かせてるんでありまして、人に言うことではなく、自分に対して怒っちゃいけないと腹にしみて自分に厳しく問いかけているような、そんな感じが「瞋(ラズ)」にするわけです。「イツモシヅカニワラツテキル」、また感じが変わります。宮沢賢治のいろんな心境が流れて来て、いろんなことを教えてくれます。

「一日ニ玄米四合ト味噌ト少シノ野菜ヲタベ/アラユルコトヲジブンヲカンジョウニ入レズニ」、こんな素直(そちよく)な厳しい内容は、言葉に出来ません。「アラユルコト」です。「ジブンヲカンジョウニ入レ」ないんですから、最後に回すってことであります。これ、やりたいと真剣にたぶん願ったはずだろうと聞こえるんであります。「ジブンヲカンジョウニ入レズ」、これはすごいことであります。

そして「入レズニワカリ」とこう書いているんですが、この、消してあるのも非常に尊いんです。が、削除の部分は全集にも後ろのところにちょっと書かれていたりすることで、印字や(教科書)や電字では触れにくいんです。そして、小中学校の子どもたちの教科書には全部は出てないということです。なかなかほんとのことっていうのは世の中に残されていないものなんだなあと思ったりしました。

その例を一つ挙げます。「ヒドリノトキハ」と書いてあります。定本の宮沢賢治全集では「ヒデリ」となっております。新版の宮沢賢治全集はちゃんと「ヒドリ」に変わってるんであります。最初の定本が何で「ヒデリ」になってしまっているのか分からないわけでありませうが、手書き文字をそのまま教科書にもし使ってあるんならば、そのまま素直に賢治の心を読みやすく、教師が誰であっても、ありのままの賢治が語っているがごとく聞けたんではないかと感じました。

私は揮毫するにあたって、小学生ですから、分かりやすい常用漢字と平仮名で、今の口語体で書いたほうがいいんじゃないですかと申し上げたんですが、依頼された方々達(依頼者、教育長さん、校長先生など)がこの通り書いてくれとおっしゃるので、この通り書くことにしたんであります。どう書いたらいいのかだいぶ苦しみました。

「ソシテワスレズ/野原ノ松ノ林ノ陰ノ小サナ萱ブキノ小屋ニキテ」、「東ニ病氣ノコドモアレバ/行ッテ」

あるお方の生き方なのだそうであります。それを賢治が、別離のときに見送りに行って、ひそかに自分のためにたぶん手帳に書きとめた。この人の生き方のように自分もそうありたいなあこう願ったんだろうかなと思います。

「東ニ病氣ノコドモアレバ/行ッテ看病シテヤリ」、「西ニツカレタ母ガアレバ/行ッテソノ稲ノ束ヲ負イ」、「南ニ死ニサウナ人アレバ/シヅカニ」と書いてあるんですけど、シヅカニをあえて消すんですね。「行ッテ/コハガラナクテモイイトイヒ」、そして上にまた大きく薄く「行ッテ」と書いた、これが優しいんですね、線の語りが。「行ッテ」と、何でこんなに大きく書いたのか、この辺に賢治の人柄が感じられて、羨ましくもあります。

それから、「北ニケンクウヤソショウガアレバ/ツマラナイカラヤメロイトイヒ」、「ヒドリノトキハナミダヲナガシ/サムサノナツハオロオロアルキ/ミンナニデクノボートヨバレ/ホメラレモセズ/クニモサレズ/サウイフモノニ/ワタシハナリタイ」。最後の、いかがですか、この音色は。「ワタシハナリタイ」なんです、自分にそうと語りかけているようなそんな気がいたします。

そして「南無妙法蓮華經」の右左に三つずつ書いてあるんであります。で、最後の「南無安立行菩薩」、この「安立」が、私は人間の教育の最終目標だろうと。それぞれ一人一人が安んじて立つ、これを指導出来れば指導になるんでしょが、人間には不可能ではないのかと最近思っています。指導するのは、拈華微笑で仏さまがあっち行きなさいと言ったら、その通りすれば間違いないうて世界ですから、人間には厳しそうです。それが、最後の「安立」。ここだけ心がひょっと見えている気がし

ます。そうしますと、読みやすいついていうことが、書（手書き）の文化としても非常に質の高さを持っているはず。と、私は思うんです。

国語科の中で、読みやすく書けるということは非常に大事なことで、それから、手で書くことは「黙読に十倍す」と昔から言います。手で書くのは、目で読むのより十倍の力を持っているということでしょうか。私が申し上げたいもう一つは、毛筆とか、鉛筆、シャープペンシル、どれでもいい、同じ手書きだと私は思っています。で、手で書くということを文字環境の中で“書字”、そして印刷機に任せる“印字”、それから電子機器に任ず“電字”、これをどういうふうに我々環境の中で位置付けていったらいいのか。今、人間がもう、太宰の頃の人間喪失というレベルではもうなくて、人間が死滅化する時代だといわれます。今テレビがまさにそんな状況であります。で、そんなまっただ中で人間はどう生き抜くのか、ということがほんとに辛くなると一方では？思われます。

ましてや死ぬのも一人（ひ・と・り）であります。そういう中で、手書きの力を生かすとしたら、どういうふうに力を借りたらいいのか。会津八一先生がおっしゃるように、「日々新面目あるべし」という、新しいということがほんとに恵まれるんだと考えると、自分が仮に書に親しんでみて、昨日と変わったのかとこう静かに問いかけてたら、若いときにはそう思わなかったんですけども、だんだん怖くなって参ります。で、本当に一時間の授業で、ほんとに人間を作るとか、あるいは、書写教育が、人間作りほんとに関われるのか、こういう静かな問いかけであります。

そこで、そのためにもう一つだけお話をさせてください。今、漢字は小学校の学年別配当表に1006字示されてますので、標準があります。ところが、平仮名はないんだそうであります。各教科書出版社にお任せされてるらしいので。今、石川県で勉強なさって他の都道府県に行ったときに、平仮名の指導はゆれる危険性があるってことです。このことは、肝に銘じなくちゃいけない。平仮名は出版社さんの数だけあるわけであります。ちなみに明治に入ったときに、日本の教育、ヨーロッパに追いつき追い越せの国力をつけるために、漢字ではなく、平仮名による文字教育を考えたようです。書写教育のパイオニアっていうのは、私は福沢諭吉先生だと理解しているんですが、福沢諭吉先生の『文字之教』というのが明治4年でしたか、出ています。その序文にそのことが書かれています。今と全く違うもの、かなり姿・形の違うものがあります。一例をあげます。これが「そ」であります。「そ」っていうのは木曾の「曾」ですから、本来、カタカナの「ソ」であります。今、教科書会社のお方の、全部続いています。少し前には、ある一社だけカタカナのように離してありました。どっちが正しいとか正しくないとかでなく、ただ違ってるということでもあります。あとは、先生方の、指導をどうするかっていう共通理解になります。少しずつ微妙にずれるのだけれども、じゃあどういうふうに平仮名を知るのかという問題です。

これは「啓蒙手習文」です。今度の常用漢字の中から啓蒙の「蒙」がなくなったようです。北方心泉上人が、金沢市の文化遺産になられたようですが、あの方の名前でもありますが「きざし」と読まれます。だけど、多くは「くらい」と読みます。今は使わない字なんでしょうが、「きざし」というなら皆さんお使いになるんでしょうかね。だけど、ちょっと明るさが見えるっていうのは、全体が暗くないと。暗いことの方が明るいより、ひょっとしたら大事なかもしれないのであります。

私の経験で言いますと、暗闇が深く暗くなってくると、どくだみがめっぽう綺麗に見えてきます。ほんのわずかな時間ですから、どくだみの花自身は、そんなに変わらないと思われれます。暗闇がどくだみの白をきれいに作る。これ、書の文化の白と黒の関係と一緒だと思われれます。

また、白川静先生は「朱」は“(神) 聖化”を内容とすると言われれます。書写指導するのに「朱で直すのは云々」という言い方がありますが、ほんとにいけないのか。ここをこうだ、っていう指導をきちんとできるのなら、そのほうがいいのではないのか。だけど、その子の呼吸を殺すのではないのか。ということも耳にします。

ほかには、こういうものもあります。揚子江の「江」であります。「け」は、計算の「計」です。これらは明治4年の字です。「ふ」っていうの、変なんです、これ。「も」も外れてしまってるんですね、横画。最後にこれ、「コト」、合字です。昔は、「コト」ってこう読めないといけなかったわけです。百年前の先祖が書いたものを読めなくなるのは寂しい話で、日本民族は、百年前の書かれたものが読める民族か、読めなくなってる民族か。今、ベトナムのほうで、ローマ字になりましたですね、表記が。で、今、自分の国の文化将来というのを考えると、やっぱり前の国語であった漢字で書いた先祖のものを読み始める気運がおこり、若い人が漢字に非常に関心を持ち始めてるっていう話を漏れ聞きましたが、なるほどと思います。

東京での実践ですが、文字でなく、絵による表記で数ヶ国の子どもたち国際的に対話しようという試みが実施されているようです。しかし、「朝」を表すのに、日本の子どもたちは“にわとり”を書くのですが、国によっては「朝」のイメージが出てこないなどの会話不通も起こるようです。人間がその命や祈りを書く文字というのは、どうあったらいいのか、とこういうことになっております。

ちょっと話を戻しますと、実はカタカナがどういうものかという事です。宮沢賢治のこの「雨ニモマケズ」というので、私はカタカナを習いました。たぶん学校では習いませんでした。そこで例を申し上げます。自分の「ジ」ってのは、「之（ゆき）」って字、これですね。カタカナは、宮沢賢治はきちっとこう、書いてるんです。「ジ」は「シ」に点なんてな教え方はしないんで、たぶん宮沢賢治なら、しないんだろうと思います。しかもこれを、濁点という。濁点、二つの点をつけるんです。その心はあったい、何なんだろうかって思うわけです。それから、今、学校教育の漢字、平仮名の指導はどうなっているのか。宮沢賢治は、カタカナをきちっと勉強していらっしやるように思います。芭蕉もそうです。書の勉強をきちっとなさっているお方のような気がいたします。だから、日本国民全員がきちんと書の勉強もしていただく方が、良いのではないか。ほんとに自分の信ずるところを相手に伝えられるのではないか。この文字環境、三つの書字と印字と電字を、どういうふうに使ったら一番力強いのか。とりわけ新聞はほとんど読まない今の若い人達、何で信じ、伝え合っていくのか。知識が欲しいといって、どんどんどんどんデータをもらいますけど、もらえばもらうほど不安になって、古くなっていく、こういう報道の宿命っていうんでしょうか、便利っていうことと、人間の命や祈りっていう問題がどう同居したらいいのか、その中で、国語科における力、よく考える、それから、書くこと。手で、書く、この、「手」っていうことであります。

付け加えてもう一つだけ申し上げたいのは、村上華岳先生が画論の中で、「私はいろんな生意気なことを書くけれど、そういうことで苦しんでいる人間の一人です。」「どうしようもない絵を描いている私である」、そして、「手である。」ということを付け加えてらっしやるんですね。手が、書いている。「手」書きであります。「書」という字はむかし「て」と読んだのであります。手で書く、ということはどういうふう考えたらいいのか。「手で考え、足で思う」って言葉があるんだそうですけど、一つの展望をくれるかもしれません。

もう一つ最後に、「サ」っていう字の字源は何でしょうか。例えば、具体的には今度、押木先生が編集に携わられたことと思いますが、書写書道教育学会のこんな新しいテキストが出来まして、その後ろの方に戦後の教育の流れがずっと書かれています。それから、平仮名の字源、カタカナの字源が出てます。宮沢賢治の「サ」はきちんとそこにあるんです。私は小さい頃、これにしょっちゅう出会っておったんです。父親がこうやって書いてたんです。ところが「サ」って何の漢字の一部をとったのって言われたら、「はっ？」てなったんです。それで多分父親の書いとったのは、「菩薩」の草かんむり二つなんですね。これ「菩薩」って読むんです。読ませる。こうカタカナ表記しとったんです。父が書いていたのはカタカナ表記かどうかは分かりません。略書きかもしれません。下にもやっぱり書かないわけです。薩摩の「薩」の上であります。研究授業で拝見した「世界遺産」の「産」もこうです。で、こ

れ、ここに並べて書きます。

そんなようなことも教えてくれます。ずいぶんすごい教材なんですね。私には過分な揮毫体験のお陰で、勉強させていただきました。それで、賢治のこの手書きの素晴らしさと、自分のためにたぶん書いていたのであろう、ここがすごいと思うんであります。人の目にふれたり、ましてや教科書にのことは予想だにできなかったのでは?と思ったりします。基本形は独学だと思います。自分ひとり、「ひ・と・り」であります。独学できる力をつける、その手伝いをしていく。

次に「石川県書写書道教育連盟」設立(H1.8.29 ホテル六華苑)の歴史についてお話しをと思います。設立の様子は書道美術新聞にも記事があって、いろいろ探すんですが、時間の範囲内で見つかりませんでした。それで、そこに北國新聞のはちゃんととってあったようです。北國新聞の記事と、その上に、後ろにも大きい写真がございますが、随分多くの人の顔がそこに写っています。

その歴史をちょっと振り返らしていただきますと、まず、金沢大学の書道研究会っていうのを、小中高で書道部経験がある方や書道の授業を受けた経験がある方は少なかったと思うんですが、でも、なんとなく風が吹きまして研究会ができて、そこで『金大書研』という新聞を出しました。昭和60年の3月10日が創刊号です。そして、第一回の研究会、このときに皆で大切にしたのは、『研究、協和、奉仕』ということであります。今、この20回、‘研究’を続けられているってこれが、‘協和’を生みます。そして、人さまの‘奉仕’につながります。三つあるのではなくて、「研究」ひとつにこもります。こう、ある方が教えて下さいました。その通りだと思います。三つあるのではなくて、研究ひとつの中に協和も奉仕もこもる。だから、研究さえしてればいい。仲良くもなるし、そして人さまにちょっと教える余力が出てくる、そのときは明確に意識してなかったんですが、後で、再度教えていただきました。「順番間違えちゃいけないよ」という言葉でした。

それから、もうひとつは、「書写書道教育と書写書道文化が車の両輪である。」ということ。これは手書き文字、書字なんですが、毛筆です。動物とか、人間も含めます。自分のからだの一部分を筆記用具にさせていただくんです。動物をいやな目に遭わして、人間がその力をいただくわけであり。なぜ毛筆がなくならないか。鉛筆だって、そんなに遜色があるもんじゃありません。外国製ですね。秀吉や家康が使用した鉛筆がいつぞや展覧会には出てましたけども。シャープペンシル、日本人(早川さん)の発明らしいですが、たくさん子どもたちが持っているんですけど、どういうわけか、学校教育で採用しない。この問題がひとつあると思います。

手書き用具として、なぜそういうことを申し上げるかっていうと、白川静先生が私の学生時代に講演して下さって、京都へまたお送りするときに、「書写用具が毛筆と硬筆が一つになって、新たな筆記用具が業者のお方で開発されたときに、新しい書道史の展開が生まれるでしょう。」たしかそうおっしゃいました。今まだ出来てないように思います。だから、新しい書道史的な展開も生まれない、とおっしゃったんだろうとこう思います。だから私は、硬筆と毛筆と分けずに、両方同じ手書き文字なんだと考えればよいのではないかと!両方とも書字です。これでいいと思うのです。分けずに考えていくべきではないのかと、ふっと思ったりすることがあります。

だから、先ほどの字でいいますと、久米公先生の文部省の退官のときでしたか、鈴木慶子(長崎大学)さんの調査だったと思うのですが、「元氣」という毛筆2文字教材があって、中学校では行書指導をしますから、小学校の楷書体でしか書かない1006字も行書で書ける力を中学校でつける必要があるんです。行書教材で、体系的にずっと整備して、そんなのを作っていただいているんですね。これなんか、大いに活用すればいいのだろうと思います。それを中学校の行書指導に入れるべきではないのか、と私は思っています。

書字、あるいは書字でなくても、文字教育によって何ができるのかっていうことに関して、郭沫若さんがひとつの回答をしてくださっているのが、1962年です。昭和37年。で、「人民教育題詞」と

して、毛筆で書かれて、手書きされているんです。そこに、「新中国が成立して以来、伝統的な教育のうちの古い陋習は切り捨てられてきたが、良いようなものは継承され、残されてきており、書法というのはその中の一つである。」郭沫若先生は、つづけて青少年が好い字を書くべきことについて、次のように述べられる。小中学生の好い字、「よい」というのは、「好き」って字をかきます。風でも好風といいます。人間と人間以外のひとが「好き」って言い合える関係であります。これは、信ずるっていうこともみんな、中にこもると思うのでありますが、「上手な字」とはけっして書いてないんです。「好い字」であります。これが、手書き文字の大事な点だと私は思っています。

また、「好い字を書く能力を育成するということは、必ずしもすべての人を書家にするということではない。それは、文字を一定の規格に基づき、端正に読みやすく書く力をつけるということである。」文字をどのように学習しかつ、身につけるべきか。よく身につけることでどういう人間づくりが出来るかということを考えなければなりません。まず一点、注意深くなります。先ほど研究授業を参観させていただき、お二人の先生の授業とも、廊下から二人目の男の子が目に入りましたけど、ほんとに注意深く書いていました。あれが大事なんですね。ゆっくり書くことが、非常に大事だと思います。速さは、ゆっくり書く中からしか出てこない。見る人は感じられないはや書きは粗相なだけなんです。ゆっくり書くことが非常に大事で、「遅い」という字の中に、速さはこもります。

それで、「注意深い人間ができる」。これはどの教科でも一緒、同じことであります。自分の人間づくりに対して、注意深い心が養われる。書字教育をするってことは、注意深い人間をつくる。これが、郭沫若先生の第1点であります。

それから、2点め。「集中力がつく」。集中力であります。今、現代の子どもたちに、これ、いかがでしょう。二人の男の子たちがゆっくり書いてましたけど、ほんとに大事な姿なんですね。何があの男の子たちの心から生まれていくのか、どのジャンルへ進んでもきつといけると思うんですね。今はたまたま書写の時間だった。私の学生時代、書道専攻した同級生なんかも、今は音楽をやったり貿易やったりしてますから。それで良いんだと思います。今自分が縁があることをどれだけ一所懸命打ち込む、何を学べるかってことにつきますんだと思ってます。

それから、もうひとつ「思いやりの心が育てられる」。この3点をおっしゃっています。

じゃ、そうでないとどうなるかっていう。「そそっかしい字を書くと、性格が大まかになる」。もし今の子どもたちが大まかな心が強いとするんならば、書写教育にはおおいに力があるのだ。それから、もうひとつ、「独りよがりになる」。そそっかしい字を書いている子供たちは、独りよがりになっていく。もし、独りよがりの子どもたちが多とするんならば、「誤りにも陥りやすい」。だから、注意深く、きちつきちつともが見られなくなっていくわけです。心を配ることが、きちつと的確でなくなっていくわけです。

亡くなった方の、手書きした文字が、死後も生き返ってしゃべりかけてくれる、こういう声が聞こえるようになると、ちょっとは人間づくりに大きい力になるのではないかと。

さっき、氷田先生がその通り書くのも大事だとおっしゃったのも、私はそんなふうに聞かしていただきました。きちつと何かの規格の中に自分を入れてみないと、一緒にならない自分が分からないと。暗くならないと白は見えないんです。太い線というのは、芸術科書道でいうと、細い線がつくる。ただ太いんでは、太い線とはいわないので。太い線は誰が決めるのかというのと、細い線が決める。細い線は太い線が決める。こういう関係になっているのであります。

高いと低い関係もそうです。成巽閣にフラットなお茶室がありますけど、普通なら高いところを作るんですけど、床の間の板の間とたたみの間が同じ高さになっている。床の間が高く目にうつる。あれすごい茶室だなあと、いつぞや拝見したときに感動しました。

以上、そんなような人間づくりをするためにいろんなことを考えながら、『金大書研』を発行して、「講

演会」も考えてみようということとなりました。したがって、書写書道教育、それから書道史、書論、それから書くこと。これのできるだけどれも大事にしながらやっつけてこうかということで、第1回の「講演会」を昭和60年3月17日に開催し、山内観先生（京都教育大学教授・日展会員）に「書と自然」と題して講演していただきました。また、第1回の「書道教育研修会」を昭和61年8月27日に金沢大学書道演習室で杉本長雲先生（故元福井大学教授）村井加代子先生（県教育委員会指導主事）を迎えて開催し、第2回は翌年に江守賢治先生（元文部省主任教科書調査官）木本峰生先生（県教育委員会七尾地方教育事務所学校指導係長）を招いて研修を重ねました。翌年、昭和63年8月25日には、久米公先生に来ていただいて、記念講演や授業研究指導をしていただきました。『書写書道教育要説』（久米公著 萱原書房）の中に「金沢市の藤島さえ子教諭の場合」と131ページに出ておりますが、それがそのときのひとコマであります。

第4回の書写書道教育研修会を平成元年の8月24日に、金沢大学書道研究会主催で、金沢大学教育学部でやりました。このときには県の教育委員会から高沢先生、そして今日もお見えになっているかもしれないませんが、七尾の教育事務所から永井志津子先生にお越しいただきました。研修会は4回開催したことになります。この「研修会」はさらに発展して、平成2年11月19日「第1回石川県書写書道教育研究大会」となっていく礎になったと思います。

併行して、10回目の「懇談会」から高校の先生方の参加を得て、昭和63年4月22日に金沢大学書道演習室で正式に「第1回石川県書写書道教育懇談会」として、石川県内の6校種をまとめた組織と研究大会を実現すべく、二つ目の土俵として大きく発展させようと、こういうことであつたかと思えます。『金大書研』発刊や「講演会」「書写書道教育研修会」開催を金沢大学書道研究会中心に取り組んだ時代を仮に「金大書研時代」というのでしたら、ここからは「石川県書写書道教育懇談会時代」と、こう名づけていいのではないかと思います。第11回懇談会が、平成元年の7月1日、さっきのガーデンホテルでありまして、そして、平成元年8月10日に第13回の懇談会、前の準備のところからひつくるめすと22回目になったと思います。第13回の石川県書写書道教育懇談会。この時には、多くの先生方も皆さん一緒に顔を合わせながら、「石川県書写書道教育連盟」の設立準備と第1回研究大会開催にむけてなどいろんな話をしたことを懐かしく思い出されます。で、この前後ずっと中川晃成先生に、事務局をお世話になりました。それから、前後してたしか昭和60年の6月27日に、石川県の美術教育連盟ですかね、それが立ち上がりました。それと、前後する形で流れがあつたかと思えます。

なお、前後しますが、石川県婦人会館（当時の名称）で第5回石川県書写書道教育懇談会が昭和63年の10月21日に実施され、同時に「石川県書写書道教育連盟」の名称が決定されて、翌年8月の設立総会へと流れたこととなります。この時期からを三つ目の土俵になります、いま現在続いております、「石川県書写書道教育連盟時代」と、こういっていいかと思えます。それが成人式を迎えたんですから、ほんとにたいへんな皆さんの心があつたのだなと、ずいぶん苦しい思いをさせてしまったのではないかと。お詫びをしなくてはならないんだろうという気持ちもありまして、お話をお引き受けいたしましたことでもあります。

平成元年は、「書写書道教育改革元年」と言われました。といいますのは、小学校の教員免許の「国語」が「国語（書写を含む）」となって“書写を含む”っていう括弧書きがついたんです。法的な措置が非常に充実しました。これを当時、関係者は、「書写書道教育改革元年」と、口に出し合って励ましあってきたという経過があつたかと思えます。8月29日の1時半からホテル六華苑であつたと私は記憶しています。それで、『金大書研』という新聞を、今度は発展解消しまして、『石川県書写書道教育』として発刊いたしました。題字は日本の学校教育の漢字の根っこであります虞世南先生の文字をいただいて、「石川県書写書道教育」という、今のタイトルの文字がこの中国・虞世南先生の楷書であります。教科書の基になっている、中国の先生であります。平成元年からずっと6校種です。小・中・高・大それに保・幼・特殊教育諸学校（当時の名称）です。「保育指針」にはまだ文字に関する項目が

ございません。これを出来るだけ近い時期に、項目が明記されるとよいと思います。そこが大事なのではないかと私は思っています。そういう意味で、石川県の本連盟の役割は非常に大きいものがある、と思っております。こういった6校種そろった県レベルの組織はいま、全国ではあまりないと思います。今私がお預かりしている福井にもありません。今石川県だけ、といってもいいんじゃないかと思えます。それから6校種および生涯教育までを包んで、そして、一国民教育としての手書き文字を含めた文字環境を考えることを将来、ちゃんと出来るだけ具体化していくことが重要ではないかと思えます。

このたび、20回をお迎えになって、最後にちょっと申し上げたいことが、一二あります。

今、1006字の中に人間が見えなくなっている漢字があります。「鼻」の「自」、文字学の白川先生が文化勲章をもらっていないから、この文字をちゃんと入れてくれっておっしゃった字であります。「臭」、「自」は、鼻の上です。そして下は「大」と書きます。「大」はこれ、人間になってしまいます。私の法水の「法」も昔、「恣」で書いたんです。今は「法」「大」を「土」に書いてしまうんです。ぜんぜん意味がわからないんです。人間見えないんですね。で、「臭」の「大」は「犬」でないと意味が出てこないんです。鼻で、人間より能力を持って優れているのは犬なんです。だから、「血塗る」といって、武器に犬殺して血を塗る、ということもやっているわけです。それで、この「犬」、点をここへ是非つけて欲しいというようなことを白川先生がおっしゃったのでしょう。漢字の中で、人間が、あるいは人間の命が、もう少しこう分かりやすいようになるっていうのも、ひとつの大切な要素ではないのかと思えます。

それから、いま申し上げた通り、保育園と幼稚園とそれから特別支援学校、第3回のときには、石川県立養護学校で、第6回で七尾養護学校でも研究大会が開催されました。だから、優れた財産があるわけです。第3回大会の公開授業のときに一番後ろの席にいた女の子が、授業済んで「疲れたあ。」って。あとで聞いたら、県の大会でも競書大会でもものすごくいい成績で書いていたのが、症状がちょっと出ると読めないような漢字になってしまう。これが同じ人間でありますけれども、文字って何なのか、書写って何を教えることなのか、特別支援学校の中での実践は、非常に大事だと私は思えます。

それから、もうひとつ、今の文字環境が、「書字・印字・電字」の、これをどういうふうにも同居させるか。そして4つ目は、人間以外の先生を、鳥獣草木、それから額、床の間の軸、これみんな先生だったわけであります。教育の三本柱として家庭教育と地域社会教育、学校教育をいいますが、この家庭の中での先生の役割を果たしていたものが非常に少なくなっているし、例えば、家庭といいますが、下の「庭」がなくなってしまうからただ単なる「家」になってしまっていると京都の庭師さんがいつぞや言っておられました。草木より、草木の命を、人間の命を感じるという瞬間がほんとに少なくなってしまう。人間の命を感じる場面どこにあるんだろう。(精神)生活脆弱になっても仕方ないのではないだろうかとか、それを今どういうふうにも、書写教育の中で人間以外の先生をどうやってつくるか。

書道文化と茶道文化と仏教文化と、この三つを、山本空外先生が西洋にはない文化としておっしゃいますが、とりわけその茶道文化との協力関係が大きな力を持っていたのではないかと、それ、あるいはそれに代わるものを今どうやって日常生活、若者の空間に作っていったらいいのか、机の上のちょっと一箇所でもいいんですね、生活空間に根ざす具体物(場所)をどう設けるか。以上4点が将来の書写書道教育を考える際の一つのポイントとして私は申し上げたかったのです。

石川県の今後の、まず40回大会、そして50年、100年の後に向けて、ひとつずつ、ますます力強い歩みになりますように、お力を皆さんで合わせられて、どうぞ、良い建設作業が進みますように深く念じまして、話を終わらせていただきます。どうも有難うございました。

大会に参加して

第20回石川県書写書道教育研究大会に参加して 公開授業から自分自身の授業を省みて

内灘町立清湖小学校 岡山 佳代

この度、初めて書写書道教育研究大会に参加させていただきました。書写書道とは大学時代からゼミや部活、バイトなど関わりを深くもちながらも、研究大会には講師という立場からなかなか参加できずにいました。今回、誘ってくださった先生には、本当に感謝しております。

書写の授業はなかなか見る機会がなかったので、公開授業を見せていただき、自分自身の授業を省みるよい機会となりました。特に、「環境を整えること」が自分の授業では不十分であったことを感じました。

まずは、児童が準備や後片付けに手間や時間をかけず、書くことに集中できる環境作り、時間作りの工夫です。教室の大きさや児童の人数、一単位時間などの決められた環境の中で、書写バックや筆洗いの活用、紙の配布方法など、様々な工夫があることに気づかされました。

次に、書写も他の教科同様、既習やこれまでの学習を生かして授業を進めていくことを意識させる掲示です。週に一時間しかない書写の時間を、より系統立てて児童に意識させる点において、既習事項や学習の足跡、児童の成長が分かる掲示はとても有効であると感じました。

最後に、児童が筆運びの様子を見たいときに反復して見ることのできる環境です。これまで、手や指を筆に見立てての指導や、黒板に半紙をはっての実書を行ってきました。書いた軌跡が残らない、遠くから穂先の向きが見えづらいなどの課題を感じながらも、プロジェクターやその他周辺機器の準備を敬遠してしまい、デジタルコンテンツでの提示をなかなか取り入れられずにいました。しかし、公開授業での様子を拝見させていただき、その良さを再確認することができました。筆運びを提示しながら児童の様子を見ることができるとい、指導者が教室に二人いるような環境を作り出すことができることに、改めてデジタルコンテンツの良さを感じました。

公開授業を見せていただき、まだまだ環境を整えるための工夫があることを教えていただきました。決められた空間や時間の中で改善できること、それは教師の工夫や努力しだいであることを改めて感じることができました。この思いを忘れずに、日々の授業に生かしていこうという前向きな気持ちになるよい体験でした。ありがとうございました。

第20石川県書写書道教育研究大会に参加して －基礎的・基本的な力をつけるために－

金沢市立緑中学校 佐渡 那々子

この度は、研究大会に参加させていただきどうもありがとうございました。本大会の、「基礎・基本をふまえて、豊かな心を育てる書写書道教育－自ら発見し、学びを深める書写書道教育－」のテーマに惹かれ、参加することにいたしました。

私自身、普段から書写の授業をしていますと、生徒の「もっと字が上手になりたい」、「理想とする字に近づきたい」という意欲を感じます。しかし、試書の段階で少しでもつまづいてしまうと、中には粘り強く書くことを諦めてしまったり、そそっかしい字を書いたまま、それでよしとしてしまったりする子も見られます。そのようなとき、どの子も意欲を持っているのに、それを十分に生かしてあげることができないもどかしさを感じてしまいます。そんなとき、本大会の研究授業を参観させていただき、コミュニケーションが、書写の時間における生徒の力をつけるための一つの手だてとなることに気が付きました。

今回参観させていただいた二つの授業は、どちらも1年生の書き初め「世界遺産」を取り扱ったものでした。まず、八田和幸先生の授業では、子どもたち同士による教え合いの姿を見せていただきました。子どもたちは、これまで学習してきたことを生かしなが、お互いに書いている姿を見せ合い、アドバイスをもとに自ら課題を見つけ、その課題を意識して練習に取り組んでいました。そうした子どもたちの真剣な姿からは、自ら発見し、学びを深めていく様子が伝わってきました。また、平山洋之先生の授業では、三人のグループ中、一人の生徒が師範役となって、他の子たちにアドバイスをおくるとい、ここでも生徒同士の学び合いの姿を見せていただきました。師範役になった子の、少し得意そうに書く姿や、教えてもらった子の、アドバイスを生かそうと真剣に取り組む姿が印象的でした。

お二人の先生の授業を参観し、当たり前のことかもしれませんが、改めて気がついたことがあります。それは、書写の時間においても、「教える」「教わる」という一対一のコミュニケーションが大切である、ということです。教わることで、自らの課題を発見し、意識し、学びを深めていくことができます。また、その授業における「教える」「教わる」というコミュニケーションが、対先生のみでなく、生徒対生徒である場合も効果的であることが分かりました。限られた時間の中でも、一人ひとりの子としっかりコミュニケーションをとって、できるだけ簡潔に、的確な助言を与えられるよう、私自身ももっとも指導力を高めていかなければならないと実感いたしました。

また、法水光雄先生による講演会「石川県書写書道教育連盟設立と書写書道教育の将来について－人間が人間になること・文字を手書きすること－」からも、たくさんのことを学ぶことができました。中でも印象的でしたのは、手書きの力についてのお話です。文字を丁寧に書くことで注意深くなり、集中力がつくということ。そして、そそっかしい字を書く性格がおおまかになり、独りよがりになってしまうということ。これらのことは、常に心に留め、これからの指導に生かしていきたいと思ひます。

子どもたちが意欲的に書写の学習に取り組み、豊かな心が育つことを願ひながら、これからも基礎・基本を大切にした書写の授業実践に励んでいきたいと思ひます。

全高書研大会参加報告

第34回全日本高等学校書道教育研究会

埼玉大会参加報告

石川県立金沢商業高等学校 教諭 水上 真由美

今大会は平成21年11月12日(木)13日(金)埼玉県大宮市にて開催されました。石川県の高校書道専任教諭が3名に対して、埼玉県は97名という大世帯だということ、また今回の大会テーマは「人間力を育む書道教育を目指して」だという点に興味を持ちました。学習指導要領の目標にも明示してあり芸術教育には生きる力を育てる力があると思います。授業を通していかに育てるか、きっとこの大会で学べることもあると期待して参加させていただきました。

研究授業は、埼玉県立大宮光陵高等学校の山下剛先生の「漢字仮名交じりの書の創作」を参観しました。書道科3年生対象で、古筆を基調として漢字と仮名の調和を考え和歌を表現するという内容です。前回の新学習指導要領で漢字仮名交じりの書が必修とされてからいろいろな実践が行われていますが、今回の改訂により「名筆を生かした表現」と示されました。山下先生は平仮名の単体が多く漢字も多い「元永本古今集」を基調に変体仮名を単体仮名に変え、漢字と仮名の調和を考えて漢字仮名交じりの書に仕上げさせます。どのような古典を用いるのか、どのように指導するのかは指導者にとって今後の検討課題だと思いました。また、授業形態にも工夫されていました。一人一人ができあがった作品を黒板に貼って工夫点などを話し、他の生徒は質問をします。他の生徒の作品をじっくり見たり、自分の工夫や表現の特徴を言葉で話すことで、さらなる表現力や見る力もつくように思いました。

分科会は「感性・脳科学」における書道教育〈共同研究〉に参加しました。今回の記念講演は脳科学者の茂木健一郎氏ということもあり、書が脳にどのような影響を与えるのかという点に非常に興味を持って参加しました。埼玉県では5年前より研究が行われています。今回の発表は書活動時の脳波を測定し、結果をまとめたもので、測定内容は次の3点です。

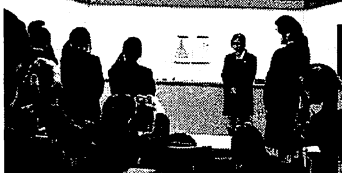
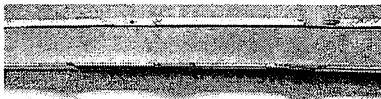
- ① 大筆による行書(蘭亭序)の臨書
- ② 小筆による女手(高野切3種)の臨書
 - 「形臨」と「背臨」における前頭前野の働きの違いを測定する。-
- ③ 紙筆による創作
 - 臨書と創作における脳の働きを比較する。-

顕著な結果・考察として、以下の2点があげられました。

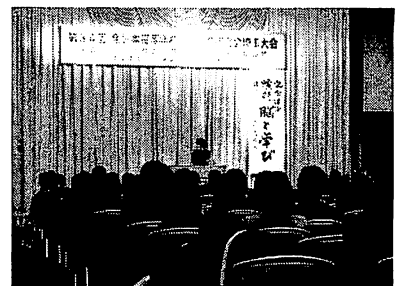
- ① 手本がない方が脳活動が高まる。
 - ② 女手の方が漢字を書く時よりも脳が顕著に活動している。
- ②の原因分析として、古典の仮名は馴染みが薄いため「よく見て」書いた結果、また

は大筆と小筆の違い（指の動きの差）ではないか。としていますが、原因追及は今後も続けていく必要があるとまとめられています。その他、今回削除した測定も非常に興味深い内容で、①書体による違い。②書風による違い。③筆記具による違い。④磨墨と墨液による違い。⑤専門家と素人の違い。の5観点です。普段から書道における人間教育の大切さを感じていますが、それをどのように説明するか、もどかしさを感じる事が多くあります。この研究がさらに進められることで、書道の大切さの理解が深まるのではないかと大きな期待を持ちました。また、これらの結果が明らかになれば、授業内容にも取り入れることが可能になります。今後楽しみな研究内容となると思いました。

そして、最後の「脳と学び」と題した茂木健一郎氏の基調講演も参加者多数となる興味深いものでした。茂木氏は、古文書を読む授業をすすめられ、読めない文章を読もうとすることは「アハ体験」になり脳のトレーニングにはとてもいいこと、そして、脳のアンチエイジングには、面倒くさいこと、特に手先を使うことは脳の領域が広く、便利な生活のおかげで低下している脳にとっては、閉じた回路をもう一度開かせるものであると手書きの大切さを力説されました。また、書字は「今の生活とはかけ離れている」と指摘し、「何のために文字を書くのかわからないので子供たちはとびつかない。」「書文化の復活のかぎはオリジナルの手紙を読むことである。」と断言されました。「今後もコンピューターやインターネットなどの現代文明の流れは止まらない。偏ってきている脳のバランスを回復するためには面倒で普段使っていない毛筆をすることは、脳にとって癒しとなる。」と繰り返されました。最後に、自分は悪筆なので今後字を変えるコツを脳科学の見地からも考えていきたいと冗談と笑いを交えながら締めくくられました。会場からの質問にも丁寧に答えられ、叱ることについての質問に対しては「脳はほめられることで伸びる。叱るのは後々にほめるためである。」と納得のいく歯切れのよい答えが返ってきました。書について脳科学の見地からもう一度考えさせられるよい機会となりました。



研究授業風景



講演会

石川県書写書道教育研究大会

20年を振り返って

「書写書道教育連盟二十年の歩み」

金沢泉丘高等学校 永江 芳教

1、はじめに

平成14年度高校書道部会発行の「書道教育」研究集録第35集・書道部会発足50周年記念特集号に、本連盟発足についての推移が網羅されている。発足前後多大なるご尽力を為され、また、これを執筆されました林昭悦先生のご功績に改めて敬意を表したい。

本特集号は、先の林昭悦先生の執筆された玉稿を再び掲載し（12回大会まで）、13回大会より今日まで併せて本連盟の歩みを振り返り「20年の歩み」としたい。

2、石川県書写書道教育連盟の誕生とその経緯

昭和60年代に入って本県の情操教育関係の組織団体が三つも誕生した。

先ず昭和60年6月に石川県美術教育連盟が発足。同連盟は、幼稚園から大学までの各美術教育研究組織団体を総括したもので、年1回研究大会を開くほか、会報を発行している。

2つ目は、昭和63年9月に石川県音楽教育研究会の設立総会と第1回研究大会の開催。同研究会は、県内各地でそれまで個別的に開かれていた小学校の音楽授業研究を一体化し、組織化したものである。

3つ目が、石川県書写書道教育連盟の誕生である。平成元年8月に設立総会を開催。同連盟は、幼稚園・小学校・中学校・高校・大学・特別支援諸学校等の一貫した書写書道教育の充実発展を期して結成された。このように、六校種まで包含した組織は全国的にも例がない。さらに現場の教員だけでなく県教委学校指導課長、同指導主事といった行政側も役員として加わった点に特色がある。それ以前にも、本県の書写書道教育の一貫性とその充実を願って発足した組織があった。昭和38年の石川県書写書道研究協議会がそれである（詳細については、「書道教育」研究集録第35集『書道教育三十年の歩み』を参照）。同協議会は、以後4回の研究大会を開催したが、昭和58年12月の理事会を最後に活動が途切れている。

また、昭和34年に結成された全日本書写書道教育研究会（全書研）に、本県高校書道部会が団体加入したのが昭和46年である。それ以

降今日まで、全書研主催の全国大会には、本県から個人参加の形で何名かが参加し続けている。私は、本（高校）部会が全高書研に団体加入した昭和五十五年までは全書研の大会に参加していた。もっともその後しばらくの間両方の大会に参加していた。近年まで、全書研の大会の開催が夏季休業中であつたため比較的参加しやすかつたのである。とにかく、参加した大会で感銘を受けた授業や発表内容については、本部会の研究大会の時や研究集録の誌上にできるだけ報告してきたつもりである。しかしながら、この小・中・高・大の各校種にわたる総合的な教育研究の場となるべき全書研石川県支部は、ほとんど機能しない状況が続いていた。結局、全県的な書写書道教育活動を行つていたのは、高校書道部会と小学校教員を中心とした石川書写の会の二つだけであつた。

そうした状況の下、昭和62年1月に、当時金沢大学助教授（書道担当）の法水光雄氏の提唱により、県内の小・中・高の書写書道教育に携わる有志が集つて懇談する会が発足した。（高校部会から5名参加）やがて、メンバーも増え、昭和63年4月には「石川県書写書道教育懇談会」と名付け、第1回の会合がもたれたのである。当初から、将来の姿を各校種一貫した書写書道教育研究組織設立に見据えながら、全国的な視野を広げる学習や県内の市・郡単位の活動状況の把握、それに校種間の情報交換等々地道な活動で回を重ねていった。そして、平成元年8月10日に石川県書写書道教育連盟の設立総会の準備をするまで、13回の会合を重ねていた。この懇談会は、現在まで継続され、すでに85回を数えている。

実はこの懇談会が発足する以前から、金沢大学書道研究会（法水光雄氏と金沢大学出身の教員で構成）が、年一回県内小・中・高・学校を対象に研修会を開催していた。懇話や模擬授業を中心に研修を深め、ほかに会報も定期的に発行していた。その研修会に高校書道部会が参加したのは、昭和63年8月の第三回石川県書写書道研修会からである。翌平成元年8月の第四回研修会には、出坂優美子氏（金沢桜丘高校）が研究発表をされ、本（高校）部会からも多数参加者があつた。

前述の懇談会とこの研修会を母体として誕生したのが、「石川県書写書道教育連盟」である。この連盟の誕生こそ、本県の書写書道教育に携わる者の長年の夢を叶える者と確信している。平成元年12月に

発行された会報「石川県書写書道教育」創刊号からも、この連盟に寄せる期待が大きいことがわかる。翌2年3月、本（高校）部会発行の研究集録「書道教育」第28集に、この連盟の設立に関する貴重な報告が法水光雄氏から寄せられているので、その一部をここに紹介しておきたい。

—— 前文は省略 ——

設立にあたりまして、次のようなことを柱立てしました。

- ① 県教委の国語科書写・芸術科書道の担当指導主事に加わっていた
　　だく。
- ② とりあえず三ブロック（金沢・加賀・能登）制をとり、将来は増
　　やす方向をとる。
- ③ 幼（保）・小・中・高・大・特別支援諸学校の六校種を対象とし、
　　しかも現職教員を中心とし、国公立を問わない。
- ④ 役員名は個人名ではなく、職名など立場を中心に組織する。
- ⑤ 将来の姿を最大に柱立てして、とりあえずの出発の姿を求める。

以上のような次第で設立された連盟は、30・50・100年後の開花に向かって、小さいながらも、しっかりと固い意“芽”を結んだことになると私は思っております。

本連盟が、心にぎやかな、色とりどりの匂いや香りの漂う花園に育ちますよう、高校部会の先生方の格段のお力添えをお願いしまして報告とさせていただきます。

「設立の趣旨」

小・中学校国語書写としては戦後最高の時間数を明示して、平成4年度以降全面実施予定の新学習指導要領への対応を図ることを契機として、県内の幼稚園（保育所）・小学校・中学校・高等学校・大学（短期大学・専門学校）特別支援諸学校などの書写書道教育と書道文化の更なる発展に努めることを趣旨とする。

こうして、平成元年8月の設立総会の時、平成2年度に第一回石川県書写書道教育研究大会を開催することが決定したのである。

3. 石川県書写書道教育研究大会の歩み

（1）1～12回大会

前項で述べた石川県書写書道教育連盟の主催で、第一回石川県書写書道教育研究大会は、平成2年11月に、小・中・高の三校種の公開授業と大会講師としてお迎えした久米公氏（当時文部省視学官）の記念講演をメインに盛大に開催された。当日の参加者は予想をはるかに上回り、全校種のほか書道塾の指導者らも含めて百数十名に達した。（高校部会から30名参加）大会役員・事務局一同は、その準備に費やすこと半年余り、万全を期して大会に臨んだのである。今思い起こすこと、当時の事務局や高校部会のメンバー（連盟の理事）のエネルギーの結集には凄まじいものがあった。研究集録には六校種すべてにわたる紙上発表がなされ、中でも幼稚園と特別支援諸学校の実践報告に高い関心が寄せられた。

大会のメインテーマは「基礎・基本をふまえて、豊かな心を育てる書写書道教育」とし、本年第十二回大会まで変わっていない。ただし、サブテーマについては毎年校種ごとに掲げてきた。問題の開催地区については、第四回大会まで金沢地区で、以後加賀・能登地区での開催が実現できるまでになった。大会講師については必ず記念講演をお願いしてきた。特に、久米公氏には第一回に引き続き、第三回、そして節目を迎えた第十回大会と計三度にわたって本県にお越しいただき、ご指導ご助言を賜ったのである。そのほか、静岡大学教授の平形精一氏にも第七回大会と第九回大会と二度お越しただいき、具体的な指導法を賜ったのである。

十二回の大会の中で最も印象深かったのは、何と云っても第二回大会の石川県立養護学校が学校公開して下さったことであろう。当時同校校長の増田荘登男氏と南進氏のご理解ご尽力の賜物と深く感謝している。教頭の南進氏と中学部主事の平杉吉次氏が担当された書写の授業をはじめ、同校の特別支援諸学校の教育を参観できたことは大変貴重な経験であった。次いで、初めて能登地区での開催が実現した第六回大会の時、ラピタ鹿島において、当時七尾養護学校教諭の清水徳典氏と高橋昭夫氏の両氏によって障害児の書写教育の実践発表がなされ、第二回大会同様、天衣無縫というべき書作品の数々に参加者の多くが心打たれたのである。

これまでの公開授業の回数を見ると、小学校が九回、中学校が二回、高等学校が四回となる。各授業者は創意工夫を凝らし、事前に綿密

な打ち合わせを行い、学習指導案検討委員会を必ずもち、万全を期して本番に臨んだだけあって当日の授業は皆見事なものであった。その都度大会講師からは絶賛のお言葉を賜り、授業研究の時の協議会においても「とても感心した」とか「自分も是非授業に取り入れてみたい」という意見が圧倒的に多かった。

最近の傾向（平成9年の第八回大会から）として言えることは、全書研や全高書研の全国大会に学ぼうという気運が高まってきたことである。そして、平成12年開催の第十一回大会の内容が一変した。従来の、公開授業→研究協議→記念講演というパターンに代わって、前半はコーディネータ、レポーター、パネラー、アドバイザーを配してパネルディスカッションを行った。しかも、小・中学校と高校の二部構成である。全書研東京大会と全高書研長野大会の参加報告を受け、テーマである書写書道教育における今日的課題に迫るべくパネラーが論議を深めていった。全国大会のように議論が白熱するまでには至らなかったものの、なかなか好評であった。後半は小・中・高の三校種から四名の実践発表がなされ、授業実践に向けての具体的手立てを探るべく、参加者が一丸となって研究協議に余念がなかった。こうして、三校種の授業研究を互いに研究し合うことの意義を改めて思い知らされた大会であった。一方、研究集録も例年と違って、大会終了後にまとめて報告として発刊された。本年開催の第十二回大会も、前年に引き続いて全国大会の報告と県内の小・高の実践を受けて研究協議を行い、二年振りとなる記念講演で締めくくられた。ただし、次年度の第十三回大会は従来の公開授業が予定されているという。（以上、高校書道部会「研究集録第35集」林昭悦氏記）

（2）13～20回大会

13回大会では、堀順一郎先生（当時菅原小）が公開授業並びに研究発表、さらに全国大会での報告を受けてのディスカッション等、熱のある研究大会であった。

その後、各大会ではそれぞれ極めて真剣な討論と総括がなされ、とても実の挙がった研究大会であった。特に、16回・17回と発表された「書写コンテンツ」は、これからの書写書道教育の在り方に

一石を投ずる指針もあり、本連盟の研究開発が、この後の研究授業に多く用いられるようになった。子供達が、自ら課題を持ち進んで書こうとする意欲、やる気が、それぞれの研究授業から十分に伺い知ることができる。19回のレポート大会での発表の中で、「うまく指導する自信なく、書写の授業が憂鬱であった」「児童の技術上達もあまり見られず、自らの考えや発見する姿勢がなかった」その時、出会ったのが「デジタルコンテンツ」であった。以後全授業で使用することで、指導者の苦手意識が解消された。又、同時に児童が自ら発見する機会を与えることができた。このように、「デジタルコンテンツ」の存在が大きく、益々盛んに活用されていくことを願っている。この「コンテンツ」開発に携わった、飯田淳一先生（当時大徳小）始め関係諸先生方、改めてご苦労様でした。

次に、今回の研究大会についてですが、第20回記念大会にふさわしく小・中学校二校種に於いて授業発表が行われた。二校種に渡っての発表は3年振り、且つ、中学校におかれては12年振りであった。小・中学校共に、子供達が生きいきと課題に取り組み、指導者の熱意が伝わって来た授業であった。更に8年振りに第20回記念大会ということで、本連盟の発足にご尽力された福井大学教授・法水光雄先生が「石川県書写書道教育連盟設立と書写書道教育の将来について 一人間が人間になること・文字を手書きすること」と題して、記念講演をされた。その中で宮沢賢治の手書き文字を例に挙げ、「手書きは何年経とうが言葉として伝える事ができる。」等、わかりやすいお話しがあった。又、この度の記念大会にふさわしく、設立当時の経緯を熱く説明され、発足当時の事がタイムスリップに思い出された。

次年度第21回大会は、レポート発表が予定されている。更に成熟した大会になることを祈念し、「20年の歩み」としたい。

最後に私毎になります、事務局長として合算6年、監事5年、理事長として4年間、皆様にご迷惑ばかりおかけいたしました。今思うと、発足当時のあのエネルギー、私だけでなく全員が持ち合わせていた。その中先輩諸氏に助けられた事が多々あり、感謝いたしております。

連 盟 の あ ゆ み

連 盟 役 員 一 覧

連 盟 規 約

石川県書写書道教育連盟のあゆみ

1987. 1. 23
(昭和62年) 有志が集い県下に校種一貫した書写書道教育研究組織設立に向けて懇談する会を発足させる。(1988. 2. 26迄に9回の会合を開く)
1988. 4. 22
(昭和63年) 石川県書写書道教育懇談会と改称し第1回の会合を持つ。[金沢大学教育学部書道演習室](1995. 10. 5迄に48回開催する。)
1989. 8. 29
(平成元年) **石川県書写書道教育連盟設立総会** [ホテル六華苑]
<平成2年度に第1回石川県書写書道教育研究大会開催することを決定>

平成元年度 石川県書写書道教育連盟役員 (敬称略)

- 名誉顧問 金子曾政<元金沢大学学長>
顧問 南 和男<石川県教育長>
相談役 北西正二 坂口 敏 田島庄吉 久田久信 氷田茂良 横西 清
- 会長 藤 則雄<金沢大学教育学部長>
副会長 [石川県教育委員会学校指導課長] 三宅正敏
[金沢市小学校教育研究会書写部長] 河本隆成<金沢市立馬場小教頭>
[金沢市中学校教育研究会習字部長] 大野重幸<金沢市立金石中校長>
[石川県高等学校教育研究会書道部会長] 佐藤政俊<金沢女子高校長>
[石川書写の会会長] 山田泰正<鹿島町立越路小校長>
[金沢大学(教育学部)書写書道教育担当者] 法水光雄<金沢大学助教授>
- 理事長 [金沢大学(教育学部)書写書道教育担当者] 兼 任
副理事長 : 幼・保部 : 嘉門久直<森本幼稚園長>
: 小学校部 : 森川登夫<津幡町立中条小校長> 谷村修次<小松市立蓮代寺小校長>
: 中学校部 : 松寺淳照<金沢市立森本中教頭>
: 高校部 : 中山武久<津幡高校教諭>
- 監事 吉田一郎<小松市立向本折小校長>
木本峰生<七尾市教育委員会学校教育課長>
- 理事 : 県教委学校指導課 :
[小学校・中学校(国語科書写)担当指導主事] 永井志津子
[高等学校(芸術科書道)担当指導主事] 高沢幹夫

* 金沢地区

- : 幼・保部 : 青山洋子<みどり・かわいい幼稚園副園長>
: 小学校部 : 林 道子<南小立野小教諭> 中川晃成<館野小教諭>
: 中学校部 : 干場和子<野田中教諭> 古本佳世<野田中教諭>
: 高校部 : 林 昭悦<金沢女子高教諭> 石浦義彦<金沢泉丘高教諭>
: 障害児学校部 : 南 進 <県立養護学校教頭>

* 加賀地区

- : 小学校部 : 穴田孝子<三谷小校長> 川筋登史己<向本折小教頭> 市村良二<木場小教諭>
: 中学校部 : 阿戸壯一郎<丸ノ内中教頭>
: 高校部 : 東野洋子<小松市立女子高教諭> 北室正枝<金沢西高講師>
: 障害児学校部 : 川上千鶴子<小松養護学校高等部主事>

* 能登地区

- : 小学校部 : 西野和代<天神山小学校長> 福田教導<金ヶ崎小学校教頭>
: 高校部 : 齋喜代子<飯田高校教諭> 大場豊治<七尾高校教諭>

事務局

:事務局長: 永江芳教<金沢商高教諭>
:副事務局長: 久田英夫<金沢中央高校教諭> 中川晃成<館野小教諭>
:庶務部: 部長・中田稚子<森本中教諭> 副部長・宮嶋雅美<明和養護学校教諭>
:会計部: 部長・佃さえ子<千代野小教諭> 副部長・八田和幸<鳴和中教諭>
:研究部: 部長・金田京子<宇ノ気小教諭> 副部長・嵐 雪絵<金大付属中講師>
:会報部: 部長・板橋法子<河南小教諭> 副部長・西尾恵美子<中島小教諭>大坂育代<湯野小教諭>
:研修部: 部長・八田和幸<鳴和中教諭> 副部長・北村千恵<山中小教諭>
:調査部: 部長・大浦 努<大浦小教諭> 副部長・宮崎聡美<松波小教諭>西川真理<野々市小教諭>

1989. 11. 15 第4回全国大学書写書道教育学会・平成元年度全国大学書道学会
~17 ・平成元年度日本教育大学協会全国書道教育部門会《後援》
12. 1 第1回理事会 [金沢商業高等学校]
12. 10 『石川県書写書道教育』(創刊号) 発行

(平成 2年度)

1990. 5. 18 第2回理事会 [金沢商業高等学校]
10. 1 『石川県書写書道教育』(第2号) 発行

11.19

第1回石川県書写書道教育研究大会
[金沢市立南小立野小学校・金沢市立野田中学校・石川県立金沢泉丘高等学校]

公開授業: 小学校2年・中学校1年・高等学校1年 研究協議

講演 久米 公先生 (文部省視学官・千葉大学教授)
演題: 「新学習指導要領のめざす書写書道の学習指導」

11. 19 第3回理事会
1991. 2. 23 第4回理事会
3. 1 『石川県書写書道教育』(第3号) 発行

(平成 3年度)

6. 4 第5回理事会 [金沢商業高等学校]
10. 30 『石川県書写書道教育』(第4号) 発行

11.18

第2回石川県書写書道教育研究大会
[野々市町文化会館・野々市町立野々市小学校・石川県立養護学校]

公開授業: 小学校1年・6年 学校公開: 養護学校クラブ活動等 研究協議

講演 續木湖山先生(帝京大学教授)
演題: 「児童生徒の心を引きつける具体的な指導方法」

11. 18 第6回理事会 [野々市町文化会館]
1992. 3. 26 第7回理事会 [金沢ガーデンホテル]
3. 30 『石川県書写書道教育』(第5号) 発行

(平成 4年度)

5. 28 第8回理事会 [金沢中央高等学校]
10. 20 『石川県書写書道教育』(第6号) 発行
11.18

第3回石川県書写書道教育研究大会 [金沢市立鳴和中学校]

公開授業: 中学校1年 研究協議

講演 久米 公先生 (千葉大学教授) 演題: 「学習指導の最適化のために」

11. 18 第9回理事会 [金沢市立鳴和中学校]
1993. 3. 30 『石川県書写書道教育』(第7号) 発行

(平成 5年度)

6. 4 第10回理事会 [金沢中央高等学校]

11.11

第4回石川県書写書道教育研究大会
[石川県立金沢商業高等学校・金沢市立富樫小学校・石川県立金沢泉丘高等学校]

公開授業：小学校3年・高等学校1年(2) 研究協議

講 演 田中東竹先生(実践女子大学教授)
演題：「江戸時代の書教育—川柳に見る手習い—」

11. 11

3. 31 第11回理事会
『石川県書写書道教育』(第8号) 発行

(平成 6年度)

6. 4 第12回理事会 [金沢中央高等学校]

10.19

第5回石川県書写書道教育研究大会[小松市立女子高等学校・小松市立安宅小学校]

公開授業：小学校6年 高等学校1年 研究協議

講 演 柳下昭夫先生(東京家政大学講師・前教育課程審議会委員)
演題：「文字感覚を養い、自ら学ぶ意欲を高める書写書道教育のあり方」

10. 19

第13回理事会

『石川県書写書道教育』(第9号) 発行

12. 1

1995. 3. 30

『石川県書写書道教育』(第10号) 発行

(平成 7年度)

6. 6 第14回理事会 [金沢商業高等学校]

9. 20 『石川県書写書道教育』(第11号) 発行

10.20

第6回石川県書写書道教育研究大会[鹿島町立越路小学校・ラピア鹿島]

公開授業：小学校3年 研究発表：養護学校 研究協議

講 演 浦野俊則先生(二松学舎大学教授) 演題：「漢字は生きている」

10. 20

第15回理事会 [鹿島町立越路小学校・ラピア鹿島]

1996. 3.

『石川県書写書道教育』(第12号) 発行

(平成 8年度)

4. 25 第16回理事会 [金沢商業高等学校]

6. 6 第17回理事会 [金沢商業高等学校]

10.

『石川県書写書道教育』(第13号) 発行

11.21

第7回石川県書写書道教育研究大会[金沢市立弥生小学校・石川県立金沢中央高等学校]

公開授業：小学校4年 高等学校2年次 研究発表：中学校 研究協議

講 演 平形精一先生(静岡大学教授) 演題：「意欲を高めるための書写書道教育」

11. 21

第18回理事会 [石川県立金沢中央高等学校]

1997. 3. 『石川県書写書道教育』(第14号) 発行

(平成 9年度)

6. 25 第19回理事会 [六華苑]

10. 『石川県書写書道教育』(第15号) 発行

11.21

第8回石川県書写書道教育研究大会[加賀市立南郷小学校・加賀市文化会館]

公開授業：小学校4年 高等学校2年次 研究協議(公開授業・大会参加報告)

講演 宮澤正明先生(山梨大学助教授)

演題：「実験を通して考える書写・書道」―「手本が無くてかける」をめざして―

11. 21

第20回理事会 [加賀市文化会館]

1998. 3. 『石川県書写書道教育』(第16号) 発行

(平成10年度)

7. 18 第21回理事会 [六華苑]

10. 『石川県書写書道教育』(第17号) 発行

11. 2

第9回石川県書写書道教育研究大会[内灘町立大根布小学校・内灘文化会館]

公開授業 小学校3年 研究協議(公開授業・中学校・大学)

講演 平形精一先生(静岡大学教授)

演題：「これからの書写・書道教育の方向と課題」

11. 2

第22回理事会 [内灘文化会館]

1999. 3. 『石川県書写書道教育』(第18号) 発行

(平成11年度)

6. 16 第23回理事会 [六華苑]

9. 『石川県書写書道教育』(第19号) 発行

10.19

第10回石川県書写書道教育研究大会

[七尾市立天神山小学校・七尾市立あけぼの幼稚園・七尾サンライフプラザ]

公開授業：小学校5年 公開学習：幼稚園 研究協議会(公開授業・ディスカッション)

講演 久米 公先生(大東文化大学教授)

演題：「書写・書道教育における今日的課題」

10. 19

第24回理事会 [七尾サンライフプラザ]

2000. 3. 『石川県書写書道教育』(第20号) 発行

(平成12年度)

6. 9 第25回理事会 [六華苑]

10. 『石川県書写書道教育』(第21号) 発行

12. 7

第11回石川県書写書道教育研究大会[金沢勤労者プラザ]

パネルディスカッション 研究協議(大会参加報告・実践発表<高等学校・中学校・小学校>)

12. 7

第26回理事会 [金沢勤労者プラザ]

2001. 3. 『石川県書写書道教育』(第22号) 発行

(平成13年度)

6. 9 第27回理事会 [六華苑]
10. 『石川県書写書道教育』(第23号) 発行

12. 6

第12回石川県書写書道教育研究大会[根上町総合文化会館]

研究協議(大会参加報告・実践発表<高等学校・小学校>)

講演 町川 哲先生(香川県土庄小学校教諭)
演題:「書写指導における具体的実践にむけて」～香川県の実践をもとに～

12. 6 第28回理事会 [根上町総合文化会館]
2002. 3. 『石川県書写書道教育』(第24号) 発行

(平成14年度)

8. 8 第29回理事会 [六華苑]
10. 23 『石川県書写書道教育』(第25号) 発行
第30回理事会 [野々市町文化会館・野々市町立菅原小学校]

12. 5

第13回石川県書写書道教育研究大会[野々市町文化会館・野々市町立菅原小学校]

公開授業 小学校5年 研究協議(大会参加報告)

12. 5

(平成15年度)

2003. 8. 27 第31回理事会 [六華苑]

12. 4

第14回石川県書写書道教育研究大会[金沢市西町研修館・金沢大学サテライトプラザ]

研究協議(大会参加報告・実践発表<高等学校・小学校>)

12. 4 第32回理事会 [金沢大学サテライトプラザ]

(平成16年度)

2004. 8. 10 第33回理事会 [六華苑]
12. 『石川県書写書道教育』(第26号) 発行

12. 10

第15回石川県書写書道教育研究大会[松任市市民交流センター・松任市立蕪城小学校]

公開授業 小学校3年・6年 研究協議(大会参加報告・実践発表<小学校>)

12. 10 第34回理事会 [松任市市民交流センター]

(平成17年度)

2005. 10. 3 第35回理事会 [六華苑]

12. 9

第16回石川県書写書道教育研究大会[金沢市教育プラザ富樫]

研究協議(大会参加報告・実践発表<高等学校・小学校>)

12. 9 第36回理事会 [金沢市教育プラザ富樫]

(平成18年度)

2006. 9. 25 『書写コンテンツ』開発(平成18～19年度)
第37回理事会 [金沢大学サテライトプラザ]

11.27 **第17回石川県書写書道教育研究大会[石川県立小松明峰高等学校・小松市立串小学校]**
公開授業：小学校3年・高等学校1年 研究協議(大会参加報告・実践発表<小学校>)

11.27 第38回理事会 [石川県立小松明峰高等学校]

(平成19年度)

2007.10.18

第39回理事会 [兼六荘]

12.4 **第18回石川県書写書道教育研究大会[金沢市立三谷小学校]**
公開授業：小学校5年 研究協議(大会参加報告・実践発表<高等学校>)

12.4 第40回理事会 [金沢市立三谷小学校]

(平成20年度)

2008.10.31

第41回理事会 [兼六荘]

12.12 **第19回石川県書写書道教育研究大会[金沢市教育プラザ富樫]**
研究協議(大会参加報告・実践発表<小学校>)

第42回理事会 [金沢市教育プラザ富樫]

(平成21年度)

2009.8.27

第43回理事会 [兼六荘]

第44回理事会 「全日本書写書道教育研究会」 団体加盟承認

12.2 **第20回石川県書写書道教育研究大会[金沢市立諸江町小学校・金沢市立高岡中学校]**
公開授業 小学校5年 中学校1年(2) 研究協議
講演 法水光雄先生(福井大学教授・石川県書写書道教育連盟相談役)
**演題 『石川県書写書道教育連盟設立と書写書道教育の将来
一人間が人間になること・文字を手書きすること』**

12.2 第45回理事会 [金沢市立高岡中学校]

平成21年度 石川県書写書道教育連盟役員

〈☆印 新〉 (敬称略)

顧問 中西吉明〈石川県教育委員会教育長〉

相談役 坂口 敏 久田久信 氷田茂良 法水光雄 押木秀樹

参与 吉田一郎 森川登夫 木本峰生 谷村修次 南 進 河本隆成
福田教導 永井志津子 中山武久 林道子 石浦義彦 林昭悦

会長 藤 則雄〈金沢大学名誉教授・元金沢大学教育学部長〉

副会長

[石川県教育委員会学校指導課長]	岩本弘子
[石川県私立幼稚園協合理事長]	田中辰実〈千代野幼稚園園長〉
[金沢市小学校教育研究会(書写代表)]	鈴木寿子〈金沢市立朝日小学校校長〉
[金沢市中学校教育研究会書写部長]	☆直江義弘〈金沢市立芝原中学校校長〉
[石川県高等学校教育研究会書道部会長]	久下恭功〈県立金沢錦丘高等学校校長〉
[石川県特別支援諸学校校長会代表]	☆寺西一栄〈県立ろう学校校長〉
[石川書写の会会長]	長井珠子〈金沢市立花園小学校校長〉
[金沢大学(教育学部)書写書道教育担当者]	折川 司〈金沢大学准教授〉

理事長 永江芳教〈県立金沢泉丘高校教諭〉

副理事長

: 小学校部: 大浦 努〈金沢市立森本小学校教諭〉
☆中川晃成〈館野小学校教諭〉
: 中学校部: 福島絹子〈金沢市立大徳中学校教諭〉 [金沢市中教研書写副部長]
: 特別支援諸学校部: 澤田清司〈県立ろう学校教頭〉 [県特殊教育諸学校教頭会代表]

監事 古本佳世〈兼六中学校教諭〉 石野昌子〈扇台小学校教諭〉

理事

* 石川県教育委員会

[小学校・中学校(国語科書写)担当指導主事] 谷藤真喜子〈県教育センター指導主事〉
[高等学校(芸術科書道)担当指導主事] 北島公之〈県学校指導課指導主事〉

* 金沢地区

: 小学校部: 石野昌子〈扇台小学校教諭〉 ☆濱田美恵子〈大徳小学校主幹教諭〉
: 中学校部: 古本佳世〈兼六中学校教諭〉 白石芳子〈西南部中学校教諭〉
: 高校部: 田中学〈金沢中央高校教諭〉

*能登地区

- : 小学校部: 奥原せい子<河井小学校教諭>
- : 中学校部: 高 絹子<田鶴浜中学校校長>

事務局

- : 事務局長: ☆岩田稚子<高岡中学校教諭>
- : 副事務局長: 八田和幸<高岡中学校教諭> 水上真由美<金沢商業高校教諭>

: 庶務部

- 部長・田中学<金沢中央高校教諭> 副部長・佃さえ子<泉野小学校教諭>
- ・西脇良樹<下甘田小学校教諭> ・永井重輝<朝日小学校教諭>
- ・山田千恵<山代小学校教諭>

: 会計部:

- 部長・西尾恵美子<串小学校教諭> 副部長・山口雅美<安原小学校教諭>
- 部員・岡野 美紀<羽咋小学校教諭>

: 研究調査部:

- 部長・柿木千鶴<諸江町小学校教諭>・副部長・飯田淳一<清湖小学校教諭>
- ・坂井雪絵<下甘田小学校教諭> ・木之下知子<杜の里小学校教諭>
- ・堀順一郎<野々市中学校教諭> ・倉下真澄<金沢大学附属中学校講師>
- ・間野清美<旭丘小学校教諭> ・東山麻由美<鳳至小学校教諭>
- ・金野 豊<富樫小学校教諭> ・西谷 充子<諸江町小学校教諭>
- ・黒川なつき<蝶屋小学校教諭>

: 会報部:

- 部長・新谷幸一<三谷小学校教諭>・副部長・北野京子<諸江町小学校教諭>
- 部員・寺井純子<蛸島小学校教諭>・岸瑞代<大聖寺高校講師>
- ・山沢聡美<芦城中学校教諭>・中辻育代<能美小学校教諭>
- ・吉田美晴<浅野川小学校教諭>・水谷清美<千坂小学校教諭>

石川県書写書道教育連盟規約

- 第1条（名称） 本会は、石川県書写書道教育連盟と称する。
- 第2条（本部・事務局）本会の本部を金沢大学教育学部内におき、事務局を事務局長の在勤校におく。
- 第3条（目的） 本会は、授業研究を中心として、県内の幼稚園（保育園・保育所）・小学校・中学校・高等学校・大学（短期大学・専門学校）・障害児学校等の一貫した書写書道教育と書道文化の更なる充実発展に努めるとともに、会員相互の親睦を図ることを目的とする。
- 第4条（事業） 本会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。
（1）研究会の開催
（2）会報の発行
（3）関連する学会・研究会・内外諸機関との連絡と協力
（4）講演会・講習会の開催
（5）調査研究
（6）その他必要な事業
- 第5条（組織） 本会は、県内の幼稚園（保育園・保育所）・小学校・中学校・高等学校・大学（短期大学・専門学校）・障害児学校の教員及び本会の目的に賛同するものをもって組織する。
- 第6条（役員） 本会に、下記の役員をおく。
会長 1名 副会長 若干名 理事長 1名
副理事長 若干名 監事 若干名 理事 若干名
事務局長 1名 副事務局長 若干名
（1）事務局には、次の六部をを設け、各部とも、部長1名、副部長1名、部員若干名をおくものとする。
・庶務部 ・会計部 ・研究部 ・会報部 ・研修部 ・調査部
（2）本会に、名誉顧問・顧問・相談役・参与を推戴することができる。
（3）役員を選出と任期は、下記のように定める。
（Ⅰ）役員は理事会において選出する。
（Ⅱ）役員の任期は一か年とする。ただし、再任は妨げない。
- 第7条（理事会） 本会の理事会は、本会の運営及び事業に関する重要事項を審議決定する。
（Ⅰ）理事会は必要に応じて、会長が召集する。
（Ⅱ）理事会は、第6条における、会長・副会長・理事長・副理事長・監事・理事・事務局長・副事務局長・事務局各部長によって構成する。
- 第8条（会計） 本会の経費は、会費及びその他の収入をもってこれにあてる。
- 第9条（会計年度） 本会の会計年度は、4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。
- 第10条（監査） 本会の会計は、監事によって監査を受ける。

〔附則〕

- 第11条 規約の改訂は、理事会の議決を経なければならない。

平成 元年 8月 29日 制定
平成 2年 5月 18日 一部改定

硯・筆・書道用品一式・水墨画用品一式
各種書画用額縁・表装・掛軸

文房四宝 **文真堂**

貸しギャラリー **文真堂** 中国古美術 **かしょう**

石川県金沢市尾張町2丁目11の28

☎(076) 264-1836 FAX(076) 264-1838

■営業時間 / 9:00~18:00 日曜日 10:00~17:00

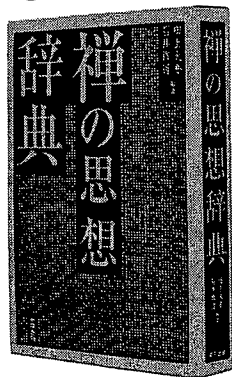
■定休日 / 祝日 ■P / 有

E-mail : bunshindo@nifty.com

ホームページ : <http://www.bunshindo.info/>

「禅とは何か？」—この問いに正面から向き合った、日本で初めての辞典!

禅の思想辞典



編著者◎ **田上太秀**
石井修道

A5判 上製本・ケース入り
定価12,600円(税込)

東京書籍
創立100周年
記念出版

【挨拶】 人として、もっとも基本とされる日常的行為ですが、
その言葉の本来の意味とは？

【日は好日】 にちにちげこうにち。茶道においても使われる言葉ですが、
その真意とは？

◎インドに源を持ち、中国、朝鮮、日本に広まった「禅」とはどのような思想背景によって形成されたのか？ 宗教としてだけでなく、芸術、茶道、さらに日本人の生活や感性深く根ざした「禅」を詳しく分析、解説する決定版。

東京書籍 書籍営業部 <http://www.tokyo-shoseki.co.jp>

〒114-8524 東京都北区堀船2-17-1 TEL03-5390-7531 FAX03-5390-7538

北陸支社 : 〒920-0918 金沢市尾山町1-8 朝日生命金沢ビル
TEL076-222-7581 FAX076-232-2719

技術と伝統・額縁と共に半世紀



株式会社

大 昌

本社 〒729-3497 広島県府中市上下町上下 1513-1
TEL (0847) 62-3517 FAX (0847) 62-4528
東京営業所 〒181-0013 東京都三鷹市下連雀1-16-5
TEL (0822) 42-3085 FAX (0822) 42-3251
福山営業所 〒721-0907 広島県福山市春日町6-14-24
TEL (084) 941-8161 FAX (084) 941-8048

額縁・衝立・屏風・掛軸 製造販売

四 練習用から作品用まで

墨液

(練習用)

墨液
濃墨液



玄宗

(作品用)

普通
中濃
濃墨
超濃



墨運堂

〒630-8043 奈良市六条 1-5-35
TEL (0742) 52-0310
FAX (0742) 45-6880

創業百年、絶え間ない研究の精華を放つ

油煙磨墨液 純松煙磨墨液

天衣無縫 松潤 書芸吳竹



紫紺系黒
純黒
青系黒
濃墨

作品用書道液



Kuretake

株式会社 吳竹
〒630-8670 奈良市南宮崎町7-576
TEL:0742.50.2050 FAX:0742.50.2070

伝統的工芸品指定 熊野筆
高級書道用筆墨硯

(株) 久保田徳

筆匠 竹嶋

☎ 731-4215

本店 広島県安芸郡熊野町城之畑 2-2-45
TEL (082) 854-0019 FAX (082) 854-5222
東京 東京都台東区台東 3-42-4
番道殿堂東京久保田号ビル



伝統的工芸品 熊野筆製造
併設全日本書作家协会蔵成工場

熊野筆センター
株式会社



本社 〒731-4215 広島県安芸郡熊野町出来庭 2-2-44 TEL082(854)0019
FAX082(854)2112
大阪営業所 〒580-0014 松原市岡 6丁目 5-5 0 TEL0723(35)0605
東京営業所 〒224-0032 横浜市都筑区茅ヶ崎中央 31-12-201 TEL045(942)4119
"アンテナショップ" 熊野筆センター広島店
〒730-0013 広島市中区八丁堀 5-2-9 TEL082(222)1919

● 因州産紙 ● 書道用紙 ● 洋紙板紙 ● 包装資材



株式会社

因州屋

〒680-0912 鳥取市商栄町 155 番地
TEL(0857)24-6611 FAX(0857)27-1811
E-mail insyuya@apionet.or.jp

高級押し部編 各種特注部 器具製作
高級木製部編 各種屏風・衝立

株式会社 サン美術工芸

933-0941 本社 富山県高岡市内免4丁目-6-3 3
TEL 0766-21-6112 FAX 0766-25-3851
*http://www.media-pro.co.jp/~sanbi

Eメール: san@p1.tcnnet.ne.jp

石津表具店

京都市中京区壬生馬場町16-5
TEL 075 (812) 3318

光村の書写教材 光村図書版教科書完全準拠

●小学校書写 児童用教材

書写の練習 1,2年上下 3~6年刊 各320円(税込)

毛筆書写の練習 3~6年 年刊 各420円(税込)

●小学校書写 指導用資料(学校備品)

毛筆書写指導ビデオ(準拠外)全3巻 各9,975円(税込)

書写掛図(硬筆) 1,2年各1巻 各12,600円(税込)

書写掛図(毛筆) 3~6年各1巻 各16,800円(税込)

●中学校書写 生徒用教材

中学 硬筆練習帳 1年/2,3年全2冊 各350円(税込)

光村教育図書株式会社 〒141-0031 東京都品川区西五反田 2-27-4
TEL.03-3779-0581 FAX.03-3779-0266

新しい時代へ
新しい発想

企画・印刷・出版の分野から 新しい時代のメッセージ

 熊登印刷株式会社

本社 ● 〒920-0855 石川県金沢市武蔵町7番10号

TEL 076-233-2550(代) FAX 076-233-2559

工場 ● 〒924-0013 石川県白山市番匠町293番地

TEL 076-274-0084(代) FAX 076-274-0016

グループ会社 ● 株式会社博文堂 シナジー株式会社

筆・墨・紙・硯・額縁・掛軸

文房四宝 絃 貴 堂

〒920-8202 金沢市西都2丁目92

TEL (076)267-2077
FAX (076)267-2078

書道、水墨画用品の激安専門店!

日本書道販売株式会社

ミドリヤ

本店 石川県能美市五間堂戊46-6
TEL 0120-58-4344 FAX 0120-58-4346
営業時間 10:00~18:00

画仙紙(紅星牌・福建紙・台湾紙・因州・伊予半紙・料紙・和紙)
和筆(広島熊野筆)、唐筆(上海工芸)
和墨(呉竹・墨運堂・古梅園・開明)
唐墨硯(端溪・老坑・歙州・澄泥・細羅紋)
印材(青田・巴林・寿山)、印刀(永字牌等)
色紙、短冊、和紙小物
額(書道額、デッサン額、水墨画用額)
表装、表装用品

★通信販売もしています

文 溪 堂

新 学 社

教育 同人 社

大和科学教材研究所

アーテック



代理店

教材・教具・文具

藤田商店

小松市新鍛冶町13の1
TEL0761-21-3278

あすを築く教育のいしずえ

北陸青葉

学校教材販売

有限
会社

本田教材社

書道セット
かきかたノート
石川書写の会編
コンクール用紙

金沢市寺町1丁目3-26
☎ (076)241-1339
FAX (076)241-7705

(株)津田精工

白山市旭丘1-4

TEL 076-276-1311

日本画・洋画

美術部

屏額掛
風装軸

壁襖
貼製
工作
事部

岡田錦成堂

安江町13 表具屋小路 ☎ 金沢 221-3658

学校教材特約店

島野教材

代表者 島野英伸

〒923-0342 石川県小松市矢田野町イの41
TEL(0761)44-2622 FAX(0761)43-2828

参考書・心理検査・各種教材

株式会社 布村教材社

〒920-0811 金沢市小坂町中35-4
TEL (076)251-1702
FAX (076)251-1701

本・雑誌・文具・CD・楽器

知性と情操をおとどける

うつのみや

柿木島本店/金沢市広坂1-1-30 電話 076-234-8111

年
松
井
秀
喜

大好評
あなたのお名前
の手本を
サービス

○名前書きの指導にぴったり
○長年使えるパウチ加工
○中央線も入って見やすい

ヤマガミの書道セットには
お手本ねーむがついてくる!

有限
会社 ヤマガミ共育社
〒921-8001 金沢市高島3-154
TEL. 291-1250 FAX.292-8008

書籍・文房具・教材・教具

粟津書店

粟津祐治

〒924-0855 石川県白山市水島町168
TEL 277-0303
FAX 277-2505

あしたの教育を拓く

- 暁教育図書 の 教育図書・教材
 - 毎日の学習教材「はつらつ」
- ### 北陸暁図書販売株式会社

金沢市石引4丁目4-4
☎(076)232-2425(代)

金沢紙商組合加盟店

取扱品 紙・印刷・事務機器・ハンコ

二木紙店

金沢市金石西3-7-9
TEL 267-0503 FAX 267-5271



教材社

金沢・北安江

TEL 231-6773
FAX 231-6940

学校教材なんでも

㈱ハローバッティングセンター

草野球から学童・中学・高校野球まで野球情報が満載
<http://www.nsknet.or.jp/~hellobc/index.htm>
E-mail:hellobc@nsknet.or.jp

〒920-0016 石川県金沢市諸江町中丁179-3
TEL/076-223-0541 FAX/076-223-0582
営業時間 AM 9:00~PM 11:00

参考書・心理検査・教材
金沢市福久町へ38番地3

 (株)教育統計会

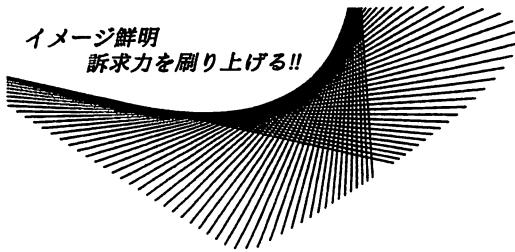
TEL (076)258-5600
FAX (076)258-1808

学校教材販売 日本標準特約店

新光社

〒929-0341 河北郡津幡町横浜1-158-6
TEL 076-288-3835 FAX 076-288-5782

イメージ鮮明
訴求力を刷り上げる!!



人・夢・色・あざやか。
MP 宮下印刷株式会社
〒920-0047 石川県金沢市大森町野原2-11番地
TEL 076263-2486(代) FAX 076263-1234